

反障害通信

26. 8. 18

194 号

これまでの左派運動＝社会変革運動のとらえ返し ——マルクス・廣松理論からの批判的・対話的検証——

まずは個人的なことから書き始めます。今、読書メモの廣松ノートが第Ⅱシリーズに入りました。で、廣松ノートというかなり学的なところに踏み込んでいますが、そもそもはわたしは運動のための理論を自称していて、第Ⅱシリーズを廣松運動論・革命論というようなところで書いている本を第Ⅱシリーズの最初にとりあげていきます。最初の二冊は、まだ廣松さんが運動と密接なつながりのあった時期に書かれた物、もう一冊はかなり経って最晩年のソ連邦と東欧の「社会主義国の崩壊」をとりあげたものです。運動関係で直接書かれ単行本にされている本は三冊のだけのようです。一応三部作になっています。

この三冊とも再読ですが、最初に読んだ時の感想は、廣松さんは結局、マルクス・レーニン主義というか、オールド・ボルシェビキの域に止まっているのではないか、ということでした。そのことは、廣松シェーレで同じような感想をもったひとがいます。「たわしの読書メモ・・ブログ 446／・渡辺恭彦『廣松渉の思想』みすず書房 2018」そのメモの中で、引用文として「もうひとつは、プロ独なり、マルクスーレーニン主義、そして前衛党論などをこの著者は、晩年まで継承していた」として用い、「そのことを検証しつつ、わたしの左翼活動の総括的なこととして改めて考え直したいと思っています。」と書きました。この廣松さんの運動論・革命論三部作の中で、その検証をします。

そのことは同時に、わたしの宿題にしている「これまでの左派運動＝社会変革運動のとらえ返し」ということでの論点の整理ということがわたしなりに煮詰められてきていて、そこでの対話になります。論点を小見出しにして文を書いてみます。

歴史的背景からする武装蜂起革命論のとらえ返し

廣松さんは『現代革命論の模索』の中で、エンゲルスの文を引いています。「無自覚的な大衆の先頭に少数の自覚した者が立って奇襲攻撃や革命をやった時代は過ぎ去った。今後においては、社会組織の完全な変革が問題であるところでは、いつでもどこでも、大衆自身もそのなかにならずにいるに違いないし、何が問題で何を目指して全身全霊をかけているのかを大衆自身がすでに知っているに違いない」（『フランスにおける階級闘争』に対するエンゲルスの序文）。廣松さんは、それにつけ加え「それを欠く限り、プロレタリアートの独裁がプロレタリアートへの独裁に転化することはけだし蓋然的である。」27Pと書いています。この意味で、エンゲルスの提言と廣松さんの言うようにロシア革命はまさに「変畸せる革命」になったのです。

そもそも、マルクス／エンゲルスが武装蜂起—権力奪取—プロレタリア独裁論を展開したのは、専制主義的支配が覆っているところでの革命の可能性を追求しているところにおいてです。後に、議会が開かれ「民主主義」的なことが出来てくる中で、選挙による可能性も考え始めたようです。レーニンも、ヨーロッパでの専制支配の極としてのロシアにお

いて、武装革命論を展開していたのです。それでも、ロシア一国における革命では、社会主義の建設はできないと押さえていました。それで、労農独裁としてのソヴェト独裁を維持する状態が、すなわち国家資本主義が続くとしていました。ところが、農を基盤としていた社会革命党のソヴェト独裁からの離脱の中で一党独裁になり、スターリンがレーニン亡き後、「一国でも社会主義建設が可能」として、「社会主義国家」の成立を宣言するに至りました。それで、「全体主義」論を展開したアーレントは、それを「社会主義」として押さえることの延長で、ナチが「国家社会主義労働者党」を名乗ったように、全体主義規定したのです。そもそもその後のロシアや東欧「社会主義国家」は、国家資本主義でしかなかったのです。そのことがきちんと押さえられない中で、冷戦構造やその後の、中国を含めた自称「社会主義」との対立を「西側諸国」は反共というところで煽って、そのことで、自らの政権を国家主義的に維持するのに使ってきたのです。わざわざ危機を煽って危機を創り出している、戦争の危機を創り出しているのです。ネタニヤフが、自ら刑事訴追されているのを逃れるために、戦争を続けているのと同じ構造です。トランプもノーベル平和賞を逃した後に自らの権力の誇示と維持のために、軍事侵攻をし、また其れをほのめかし、「関税戦争」を仕掛けています。政権支持率が下がると戦争を始め、支持率を上げ体制を維持しようとするのです。

さて、今日的に、そもそもポストコロニアリズムで、グローバリゼーションという経済的支配のシステム下で、民主主義的なところが浸透していくという期待があったのですが、プーチン・ファシズムやトランプ・ファシズムの隆起で、ポスト・グローバリゼーションというような事態も起きています。そして、そもそも戦後「民主主義国」を自認していたアメリカが、世界のあちこちで侵略的な戦争を続けていた歴史があります。そして、プーチンのウクライナ侵攻で、民主主義が世界を覆うという楽観論がもてなくなりました。

近くは、韓国において、軍事クーデター未遂事件も起きました。

ファシズムの隆起の中で、極右・ファシストの左派やリベラルへの白色テロの問題があります。ナチの突撃隊のテロルやアメリカのトランプの煽動によるトランプ支持者の国会議事堂突入事件など起きています。そもそも、右派が反革命クーデターを起こすことは歴史的に明らかです。そのことへどう対処するのかの、方針を立てなくてはなりません。

そういう中で、一体どうして、戦争のない、暴力や差別のない社会がつくれるのかの方針を出して行かねばなりません。

プロ独論のとらえ返し

そもそも、「武装蜂起—権力奪取—プロレタリア独裁」論ということで、その再度のとらえ返しを前項で書いたのですが、そもそも「プロレタリア独裁」という突き出しが妥当だったのかの検証が必要です。

「独裁」という言葉のイメージが悪いから「執権」という言葉に換えるというよりも、もっと根底的なとらえ返しの問題です。労農独裁—ソヴェト独裁として出発して、党の独裁になった時点で、そもそも「変畸」せる革命で、「社会主義の定立に失敗した」と押さえることで、プロ独論の見直しが必要だったのではないのでしょうか？ プロレタリア独裁ということは、資本主義社会は「ブルジョア独裁」で、「プロレタリア革命はプロレタリア独裁を目指す」という論理なのですが、そもそも資本主義社会は必ずしもブルジョアだけに

基盤をおくわけでもなく、資本主義の初期は地主や貴族という支配層もあり、そして資本主義が煮詰まると、全有産階級の突撃としてのファシズムということが起きてきます。だから、そもそもブルジョア独裁—プロレタリア独裁という対比で、プロレタリア独裁を置くのは、おかしいのです。

マルクス／エンゲルスは『ゴータ綱領批判』で、ゴータ綱領の案の中にあった、「プロレタリア階級以外はみな敵である」というような規定を批判しています。それはロシア革命においても、プロレタリア独裁ではなく、労農ソヴィエト独裁として「革命」を起こしたのです。そもそも農民に基盤をもたず、他党派解体戦略を展開したのだから「同盟」にむしろ失敗したのではないかと思えます。

そして、そもそも「帝国主義論」からすると、「後進国」の民衆との連帯ということにおいて、プロ独論はありえるのでしょうか？

それは、実は「先進国」—「後進国」というところの差別、そして民族・人種問題という差別というところからのとらえ返しの問題です。そもそも、「マルクス派は差別の問題をとらえ返せていなかった」という批判があるのです。サイドはマルクス／エンゲルスが『共産党宣言』の中で、「野蛮の文明化」という脈絡での帝国主義的支配を一定合理化するようなことを書いていることを、『オリエンタリズム』の中で批判しています。そもそも、マルクスの時代も性差別の問題の意識がありました。それらのことを押さえたところで、反差別というところからすると、プロレタリアだけを革命主体とするような「プロレタリア独裁」論をどうして突き出しえたのでしょうか？ プロ独論自体の問題性を、反差別というところから総体的とらえ返しをする必要があったのです。マルクスは、やがて、アイルランド問題で「帝国主義—植民地支配」の問題を対象化し、更に『経済学批判要綱』の中で、アジア的生産様式論を展開し単線的発達史観を見直し、更に『古代社会ノート』、ザスーリッチへの手紙の中で、共産主義論を生み直す作業を進め、差別の問題をとらえ返す途を示しています。今日、マルクス理論の紹介・解説者の役割を担っていったエンゲルスがどこまで、それを対象化しえていたのか、というところで押さえ直す作業が進んでいます。レーニンも、まさにこのエンゲルスの地平にとどまり、差別の問題を、「階級支配の道具論・手段論」としか押さええていないのです。

レーニンは「民族自決権」ということを突き出したので、そこにおいて差別問題を押さえているとされるのですが、中央集権制をひき、革命の防衛の第一義性というところで、自らが提起した「民族自決権」を踏み外しています。中央集権制と民族自決権はアンチノミー（二律背反）に陥るのです。民族自決権という国民国家論や民族自治論では、国家主義に陥っていくこともあります。

また、マルクス派で差別を対象化している論客は、ネグリ／ハートのマルチチュード論やグラムシ／スピヴァクのサヴァルタン概念で、革命の主体に「他の」被差別者を含めることを理論化してきています。そもそも、「後進国」の民衆という被差別者総体を切り捨てた、「先進国革命論」でしかないのです。「共産主義者には国境はない」というテーゼに反してもいるのです。

前衛論—外部注入論のとらえ返し

そもそもマルクスには、有名な「労働者階級解放は、労働者自身の事業である」という

テーゼがあり、レーニンの「前衛論」—外部注入論はそれを踏み外しているということがあるのです。しかし、そもそも今回、廣松さんのマルクス／エンゲルスを引用している文を読んでいると、マルクス／エンゲルスにあっても、そのようなニュアンスの文があるのですが、それをどこまで積極的に突き出そうとしていたのでしょうか？　そもそもマルクス／エンゲルスも革命的インテリゲンチヤと言われる階級で、かなり、自ら革命的運動に理論的にアンガージュしていたのです。それからすると、「外部注入論」と言えなくもないのです。そして廣松さんも、この三部作で、まさに「外部注入論」的な論攷を展開しています。

ただ、廣松理論からすると、「主体—客体」図式批判や哲学的なところで、「二項対立図式」自体の批判もあったのに、なぜ、廣松さん自身が、「前衛党—大衆」という図式にまさに嵌まってしまったのでしょうか？

「障害者運動」において語られていた「当事者主体」という概念があり、それらのひとたちを「新しい社会の「水先案内人」に！」という概念も出てきます。ただし、「大衆」たる「障害者」は「前衛」ではなく、何も語らないでも、その存在によって、「水先案内人」になるのです。それは、被差別の問題総体においても、「前衛」は被差別当事者民衆なのです。もちろん、被差別者も自らの個別被差別においては、「前衛」であっても、他の被差別問題では、対象化出来ていず、差別的ということもあり、ただ、自らの被差別から、差別総体も対象化しえて、そこから、階級問題に演繹することによって、「階級的覚識」に到達しうるとも言えるのです。

廣松さん自身が、「各種理論を理解しうるかどうかは、知的蓄積よりも、立場性の問題が大きい」という主旨の文を書いています。

函数概念としての「前衛」—むしろ「後衛」—は、因果論ではない相関関係としてあるのではとも思えます。

そもそも「前衛党」論自体が、知による抑圧という差別の問題も孕んでいます。

労働者にも自ら抱える差別の問題、それは生産手段の所有からの排除や、分業的労働に於ける決定からの排除、労働能力を巡る差別があり、更に、個別にいろいろな差別の問題も抱えられています。そういう中で、労働運動や反差別の闘いから総体的に差別をとらえ返すことによって、闘いの主体は「外部注入」ではなく形成されうると言えるのではないのでしょうか？　そういうこととして、「外部注入」論批判ができるのです。

「先進的部分」としての「前衛」は、むしろ反差別的総体的立場の確立から生まれ出るのであって、知識階級もなんらかの被差別の問題を抱えているところでは、同じ立場性もあるのですが、知的階層の理論的貢献は、軍事用語を使いたくないのですが、敢えて使えば、むしろ「兵站的後衛」としてあるのではと思えます。これは、むしろ「前衛党論」の否定の理論になるのです、

永続革命論

「永続革命論」というのはトロツキーが、書籍の名前にしたところで有名ですが、そもそもマルクス／エンゲルスも使っています。二つの脈絡があります。一つは、プロ独までの過程を巡る話と、それを含んだ、主にプロ独から共産主義へ進むためには永続的な革命が必要だということです。前者は、そもそもプロ独として立てたこと自体の問題性も孕みつ

つ、段階革命論かシームレスな移行なのかの問題がでてきます。「ロシア革命」におけるソヴェト独裁は、当初ボルシェヴィキのほとんどは、ブルジョア民主主義革命として押さえていました。それを、トロツキーなどが二段階革命論ではない「永続革命論」を突き出して、もともとブルジョア民主主義革命論だったレーニンが四月テーゼを突き出し、それで十月革命でソヴェト労農独裁を生み出しました。その後は、スターリンの「共産党独裁」支配の中で、「社会主義国家」の定立を宣言し、ロシアとその衛星国の維持を第一義的に置き、時にはその拡大を目指すというブレの中で、ロシア革命の永続的展開を結局放棄したのです。

そもそもレーニンは世界革命なしには、ロシア革命は「永続革命」に踏み込めない、と押さえていたのですが、スターリンは「一国でも社会主義建設は可能だ」として、既に「社会主義として定立できた」としたのです。結局「永続革命」の否定になってしまったのです。そういうところで、アーレントのいう全体主義国家、ファシズム国家になってしまったのです。わたしは、すでに何度も書いているのですが、アーレントの「全体主義」規定は間違えていると指摘しています。そもそもアーレントは「個と全体の利益」というところで二項対立図式に陥り、全体の利益の優先の中で個の利益を抑制するということで、「社会主義」を押さえ、ロシアに社会主義が定立している、という錯誤の上にたって、全体主義規定してしまっているのです。そもそも、ドイツ革命の敗北の中で、世界へ波及していく構造が断ち切られ、ソヴェト独裁も党独裁になり、新経済政策をとった時点で、レーニンは「これは国家資本主義だ」と規定していました。スターリンの一国社会主義路線は、まさに「永続革命」の放棄になってしまったのです。そのことは、一九九〇年を挿むロシアのソ連邦崩壊と東欧「社会主義国家」の崩壊、中国の市場経済原理の強化の中で、自称「社会主義国家」が「国家資本主義」でしかなかったことを露呈して、その方向での「永続革命」ということが、出てこないことが如実になりました。では、マルクス／エンゲルスが提起した「永続革命」の途の可能性は、現在的にどう示されるのでしょうか？

協働—協同組合運動論

ひとつは、生産・流通・消費の協働・協同組合運動です。

マルクス／エンゲルスの時代にも協同労働組合論がありました。そのラッサールの「国家の支援による協同労働組合運動」の主張を、マルクスは批判していました。これは、次項の国家主義批判から批判されることなのですが、マルクスは、生産労働的協働（この場合は協同ではなく協働）労働組合に留目していたようです。わたしは、これは反差別論的な立場で、中央集権制でない地方自治—「分権」的なところで、また地産地消的なところで、攻め上げる構造改革的革命論としてのひとつの途として示し得ると思います。

そしてその中味としては、わたしはひとの生きる基本としての食の第一次産業としての農や漁業での生産労働組合的活動として押さえ得ると思います。何故、第一産業かと言えば、総資本からする排除、原材料を供給しないという締めつけから、比較的に逃れうるからですが、勿論第二次産業においてもいろいろな創意工夫による協同組合的労働組合活動が考えられますが、原材料を止められる可能性が拭いきれず、しかも、そもそも生活基盤を整えるということよりも、第二次・第三次となると欲望の生産・再生産という局面が強くなります。だから、基本生活保障から始めるという意味において、ひとの生

きる基本としての食ということに留目した協働労働組合的などころから攻め上がる、地方から中央に攻め上がるという構造変革的運動としての生産協働労働組合の意義がひとつの社会変革のモーメントとなりえるのではないかと押さえ得ます。

協働組合論にこの間留目してきたのは、この間学習してきた廣松理論の協働連関態論からもリンクしていくのです。

哲学の世界では「ひとは〇〇する動物である」というところで、〇〇に何を規定するかが一つの議論になってきました。ひとつは、「言語を話す」があり、他には「道具を使う」とかもあり、・・・廣松さんは、そこに「役割期待——遂行する」と置いています。勿論、この議論は“本来的”という物象化に陥る可能性があるのですが、そのことを押さえつつも、廣松さんは『存在と意味』において、協働的連関態という概念を突き出していて、そこからとらえ返すと、役割分掌の中で分業という固定化に陥らないで、協働する中で、新たな共同性を協働によって獲得していく途が示されるのです。廣松物象化論を押さえると、「能力」ということ自体が関係性総体として蓄積された「コモン」(共有財)としてとらえられることで、役割分掌的に協働によって作られた物も、コモンとなります。まさに、これが komunizm(共産主義)なのです。

反差別・共産主義論

もう一つは、反差別というところでの「永続革命」的推進です。これは、今日隆起してきている極右・ファシストが国家主義と差別主義を両輪的に展開してくる事への、反ファシズム統一戦線的な意味合いも含んだ運動になっていきます。ファシズムは車の両輪的に差別主義と国家主義で推進してきます。それに対峙し、徹底的に批判してくためには、反国家主義と反差別というところから攻めて、反差別の思想と立場性を獲得していくことが必要になります。

ところが、そもそも、「マルクス主義者は差別の問題を対象化しえて来なかった」という批判があります。マルクス／エンゲルスの『共産党宣言』において、まだ「帝国主義」論を確立できていなかった時代ですが、植民地支配を「野蛮の文明化」という脈絡で書いている文があり、それをサイードが『オリエンタリズム』で批判しています。マルクスはアイルランド問題の対象化から、「帝国主義」的問題を対象化し、『経済学批判要綱(グルントリッセ)』1957-8の中で、「資本主義に先行する諸形態」として、アジア的生産様式論を展開し、単線的発達史観の止揚の途に踏み込んでいます。『ゴータ綱領批判』1875でのまだ「文明国」の文言がありますが、「古代社会ノート」と「ザスーリッチへの手紙」1881-2で原始共同体的なことや、ロシアのミールという農業共同体の発見など、発達史観の止揚の可能性を孕んだ論攷を書いています。さて、これには、マルクス主義の紹介者的になっていったエンゲルスがどこまで、後期・晩期マルクスの転回を共有化していったのかの問題があり、むしろヘーゲルへの先祖返り的なになっていったという指摘があり、そのエンゲルスの思想を継承したレーニンの問題性も、そこからとらえ返す必要が出てきます。差別の問題で言えば、「差別＝階級支配の手段(道具)」があります。これは、そもそも、階級の問題も差別のひとつ(資本主義社会の基底差別でマジョリティとしての被差別問題という特徴があるにせよ)であり、そのことからすると「階級差別は階級支配の手段である」という意味不明の定義におちいるのです。差別は階級差別と他の被差別事項が重なり合うところで、

もっと熾烈な差別として顕れてくるということを押さえたところでの、差別を総体的にとらえた運動が必要になると押さええます。

さて、ローザ・ルクセンブルクは『資本蓄積論』で、「継続的本源的蓄積論」を展開しました。これは、資本主義の成立時の「本源的蓄積」だけでなく、継続的に経済外的モーメントにもよって、資本の蓄積を求めるという論で、このモーメントを差別という処から説き起こしていく途が示されるのです。そこで、「後進国革命論」や、革命主体をマルチチュード(ネグリ／ハート)やサヴァルタン(クラムシ／スピヴァク)概念を取り入れ、マジョリティであるプロレタリアートをも被差別者と押さえたところで、反差別論というところから、革命の展望を押さえ直す必要が出てきます。

更に、ここでこの項の冒頭に書いた問題、資本主義がどうしても煮詰まり繰り返し出てくるファシズムと対峙することでの、国家主義的イデオロギーとの対峙の問題があります。そもそも、レーニン国家論にはマルクス／エンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』を読んでいず、その中に書かれていた「国家＝幻想共同体」規定を知らなかったという言説があります。これは実は、レーニンはマルクスが書簡の中で、「国家＝幻想共同体」規定を展開しているところを抜き書きしていて、全く識らなかったわけではないという話も出ていて、むしろレーニン国家論はそのことを切り捨てて、専制支配的国家主義時代のマルクス／エンゲルスの武装蜂起→権力奪取→プロレタリア独裁論を、ロシアの専制支配国家に対峙して、そのまま維持し当て嵌めたという構図になります。

さて、レーニンとローザ・ルクセンブルクのあいだには差別の問題も含んだ論争があり、それをレーニンが正しく、ローザは間違えていたということが、今日の、左翼党や党派がリベラル化した党を除いて、ことごとくマルクス・レーニン主義として生き残っているところで、広まっているのですが、その端的な例としての民族自決権はそもそも、中央集権制や革命の防衛第一主義において、そもそも虚構でしかなかったということが明らかになり、レーニンの差別＝階級支配の手段論によって、反差別運動がことごとく階級闘争・革命闘争の政治利用主義に陥っていったことがあります。

中央主権化やプロ独論では、国家主義へのとらわれに陥っていく、「幻想共同体としての国家」規定から、反差別の地平からのとらえ返しの中で、中央集権化ではない、地産地消の地方分権化としての革命の可能性をとらえ返すこと。議会による変化というところでも、地方自治から攻め上がるという構図も出てきます。

そのような総体的、また根源的なとらえ返しこそが今問われているのではないかと、わたしは押さえています。

(み)

(「反差別原論」への断章) (122) としても)

読書メモ

今回は、巻頭言に連動した、廣松ノートの運動論的三部作です。勝手にわたしが三部作と言っているだけです。ただ、廣松さんの運動論的思想は、マルクス・レーニン主義的なところ以外からも若干の取り込みをしているようですが、基底的な論考はほとんど変わっ

ていないと押さえています。まさにオールド・ボルシェヴィキ的というか、マルクス・レーニン主義の枠組みにあるようです。マルクス・レーニン主義的な運動論への批判的な押さえも含みつつ、読書メモを残していきます。

たわしの読書メモ・ブログ 734 [廣松ノートⅡ— (2)]

・廣松渉『現代革命論の模索』新泉社 1972

読書メモの 731 の「マルクス・エンゲルス革命論の栞」で、[廣松ノート第Ⅱシリーズ]に入りました。[廣松ノートⅡ— (1)] と番号をふりました。

実は第Ⅱシリーズの最初の予定では、「初期マルクス主義三部作」から始め、第Ⅰシリーズの『事的世界観の前哨』で、メモを取り損なっているところを押さえると共に『科学の危機と認識論』を読んで、『資本論の哲学』……と読み進める予定だったのですが、わたしは、運動のための理論を自称していて、その理論化の作業として、学的事実の学習の必要性を感じ、哲学においては廣松哲学を読み込んでいるのですが、ファシズムの隆起的な状況で、宿題としての自己の、そして左翼運動・共産主義的運動の総括を進める必要性を痛感しているところで、廣松さんの「運動論」的なことを先に取り上げようとしているのです。

廣松さんは、マルクスの文献学的な研究をしているのですが、そもそもは運動家でした。で、哲学といわれる領域を中心にアカデミックの世界に入り込んでいったのですが、その著作には読み込んで行くと「闘争宣言」というような内容もあります。そして、運動的なところにコミットし続けていました。

実は、もう運動家的なところでの共著『日本の学生運動』があるのですが(わたしはまだ入手していません)、単著の運動論的な本は、三冊しかありません(わたしは、勝手に三部作と呼んでいます)。最初 70 年代に二冊、最晩年に一冊出しています。最初の二冊と、最後の二冊はかなり趣も違うのです。わたしは、これら三冊とも再読ですが、そもそもレーニンがこてんこてんに批判しているマッハの本の翻訳をし、その理論の哲学的意味をも押さえて、レーニン哲学の批判をしているのですが、最初読んだときの感想は、結局廣松さんは「オールド・ボルシェビキ」ではないかという印象でした。かなり幅広く読んでいくひとなので、年代順に押さえていくと、他の理論との対話もでてくるのですか、結局、「マルクス・レーニン主義」の枠から抜け出せていないように感じたのです。今回の再読でも、結局同じ印象を懐いたままです。

読書メモは一冊ずつとっていくのですが、今回は、三冊全部読んでから、総体的なメモを三冊の読書メモを載せる「反障害通信」の巻頭言で書き、各論的に一冊ずつ、読書メモを目次をあげ、備忘録的に若干の切り抜きメモを残します。

実を言うと、次の読書メモ 735『新左翼運動の射程』を先に読んで、この本を読んだのですが、年代的に追うと、明らかに、こちらの『現代革命論の模索』が先になっています。これまで、だいたい読んだ順に読書メモを書いてきたのですが、今回は一挙に三冊読んでから、メモに取りかかっていますので、廣松さんの中でも多少年代での変化が出ていますので、出版順に並べ替えました。なお、最後の 736 の『東欧激変と社会主義』に付録的についている文は、この本の「第二部 新左翼運動革命理論の課題状況」「第二章 旧左翼の

隘路と新左翼のコース」にもあります。時代的にはこちらの方の時代区分に属するので、こちらの方に、読書メモを残します。

なお、この本は、最初 1970 年に盛田書房から出されたのですが、出版社が倒産して、改めて、新泉社から新装版として出されたものです。

目次

新装版への序言

序文

序説 新左翼運動の存在理由

第一部 新左翼革命路線の史的位相

第一章 マルクス主義革命論の第一段階

第一節 『共産党宣言』時代の革命論

第二節 四八革命と「永続革命論」

第三節 第一インター期の新展開

第二章 「第一段階」から「第二段階」へ

第一節 老エンゲルスの遺した問題

第二節 第二インターと修正主義路線

第三節 レーニン主義と革命性の復興

第三章 「第二段階」から「第三段階」へ

第一節 第三インターとその適合不全

第二節 マルクス主義の危機とその展相

第三節 新左翼革命運動の課題と位相

第二部 新左翼運動革命理論の課題状況

第一章 資本主義の“変貌”と現代革命

第一節 資本主義体制批判の視角

第二節 現代資本主義の“変貌”

第三節 現代資本主義と共産革命

第二章 旧左翼の隘路と新左翼のコース

第三章 武装大衆叛乱型革命路線の模索

付 「疎外革命論」の超克に向けて

あとがき

さて、切り抜きメモです。備忘録的に簡単に書き遺します。対話というか、問題提起を「・・・」の後に斜体文字で貼りつけます。

「序説 新左翼運動の存在理由」

「これに対して新左翼は、いわゆる社会主義諸国の現状と趨向は、共産主義社会への方向

性を持した正常的發展の途上にあるものではなく、時を追って変畸の度を高めつつあると判断する。」22P・・・そもそも「変畸せる革命で、労農独裁—ソヴェト独裁として出発してて、党の独裁になった時点で、「社会主義の定立に失敗した」と押さえること。

「・・・・・・・・新左翼はこの意味に置いて——すなわちソヴェト形態を採るか否かといった次元においてではなく、より基底的な意味において——ロシア革命を固定的なモデルとはしない。」26P

「・・・・・・・・前衛党を只管(ひたすら)に信じて蹤(ついて)来る大衆ではなく、積極的・主体的にアンガージュする大衆の圧倒的な形成を自己に課する。」26P・・・前衛—大衆という設定自体が問題なのでは？

「エンゲルスもいう通り「無自覚的な大衆の先頭に少数の自覚した者が立って奇襲攻撃や革命をやった時代は過ぎ去った。今後においては、社会組織の完全な変革が問題であるところでは、いづどこでも、大衆自身もそのなかにならずにいるに違いないし、何が問題で何を目指して全身全霊をかけているのかを大衆自身がすでに知っているに違いない」(『フランスにおける階級闘争』に対するエンゲルスの序文)・・・・・・・・それを欠く限り、プロレタリアートの独裁がプロレタリアートへの独裁に転化することはけだし蓋然的である。・・・・・・・・」27P・・・この意味で、エンゲルスの予言通りロシア革命はまさに「変畸せる革命」になった

「——ちなみに、かくのごときは、民族闘争の延長線上に存立しうるものではなく、また構造的改良の積み上げによって準備されうるものでもない！——」27P・・・？ 総体的反差別の運動による関係性の構築や協働・協同組合的運動の中での関係性の構築

「第一部 新左翼革命路線の史的位相／第一章 マルクス主義革命論の第一段階／第一節『共産党宣言』時代の革命論」

「旧来の歴史は——当時まだ原始共産体——の存在を知らなかったマルクス・エンゲルスによれば——階級闘争の歴史」38P

「ルンペン・プロレタリア」40P・・・現代的には非正規雇用の拡大の問題からとらえ返す必要

「この政治的支配、すなわち、プロレタリアートの独裁は、暴力的に実現されることならざるをえまい。」40P・・・27Pのエンゲルスの引用と矛盾

「『宣言』には、労働者階級が自然成長的に階級形成をとげ、全国的な団結をかちとるであろうことの“客観主義的”ともみえる叙述はあっても、前衛部分の積極的な介入の思想は欠けてる。しかも、単なる叙述の欠落ではなく思想上の問題である。」44P・・・「前衛論的なことはマルクス・エンゲルスにあっても、それをどこまで積極的に突き出そうとしたのだろうか？

「・・・・・・・・前衛部分とプロレタリア大衆との動力的な相互関係、プロレタリアートを階級として形成するうえでの組織戦術や組織形態などについては何一つ語られていない。」45P・・・そもそも「前衛党論」自体を反差別論の地平からの止揚の必要性

「第二節 四八革命と「永続革命論」

「われわれはここで余りにも有名な『一八五〇年三月の共産主義者同盟中央委員会の同盟員への回状』における永続革命論をみななければならない。そのなかで、われわれはマルク

ス主義における革命的ゲヴァルトの問題、“別個に進んで同時に撃つ”統一戦線戦術、“主要打撃”の問題、選挙に関する問題、等々について、マルクス主義革命論の原像ともいえるべきものを確認することができる筈である。」50P・・・回状の主旨、反ファシズム統一戦線との関係、永続革命論が武装蜂起・権力奪取・プロ独の樹立と進むときの画段階的区別性、すなわちプロ独の樹立以前と以後では意味が違って来る。

「労働者は、単一不可分のドイツ共和国をめざしてつとめるだけでなく、この共和国内でも、権力を国家権力の手中にもっとも徹底的に集中することを目標としてつとめなければならない。……一七九三年のフランスでそうであったように、今日のドイツでも、最も厳格な中央集権化を実現することが真の革命党の任務である。」(『回状』からの引用)57P・・・中央主権化やプロ独論では、国家主義へのとらわれに陥っていく、幻想共同体としての国家規定から、反差別の地平からのとらえ返しの中で、中央集権化ではない、地産地消の地方分権化としての革命の可能性をとらえ返すこと。

「……………この(永続革命論の)発想が鮮明に押し出されたのは何といってもこの『回状』においてである。」59P

「この独自の武装＝二重権力の構築という方針は、二段階戦略的な発想からは出てこないものであって、これが永続革命論からの必然的な帰結であることはあらためて指摘するまでもあるまい。……………」64P

「前衛による一元的な階級型性とその指導による大衆操作主義的な階級決戦という発想ではなく、あくまで、それ自体物象化されて自己運動するところの大衆闘争の動力学にふまえて、そこに現出するであろう諸派のヘゲモニー争奪の予料のうえに立って、当の渦中に自らアンガージュすることによるキャナライズということ、『回状』ではこの基本的な構えが貫いている……………」65P・・・必ずしも前衛—大衆という図式ではない押さえ、でも前衛党論からすると矛盾するのでは？

「第三節 第一インター期の新展開」

「「……現在の専制的制度を、自由で平等な生産者の連合社会という福祉をもたらす共和的制度でおきかえることが可能だということを実地に証明する点にある」という、労働者階級が、「協同組合的商業よりも、むしろ協同組合生産」に力点を移すように勧める。」75P・・・生産・流通・消費の協働・協同組合運動

「……………マルクス・エンゲルスは、一方では既存の国家機構を狡猾的に利用しようとするラッサール派的な行き方を卻けると同時に、他方では国家の即時的な廃止を志向するブルドン主義的ならびにバクーニン主義的な無政府主義をも卻け、既成国家機構の粉碎、プロレタリア独裁、それを介しての国家一般の死滅という原則を具体化するに至った。」75P・・・プロ独から国家死滅への道が永続革命論としても、それが示されていないところで、国家主義に陥っていく危険性

「……………「労働者階級はできあいの国家機構をそのまま掌握して、それを自分自身の目的のために行使することはできない」ということ、旧来の国家機構は唯粉碎するしかないということ、この知見が明確に確立されるに至ったことである。」83P・・・この方針で、それを踏み外す国家主義に陥ったことの総括が必要

「マルクスは、アメリカとイギリスに限ってであるが、一八七一年のクーゲルマン宛の手

紙以来、議会を通じてプロレタリア政権が確立されうる可能性をいち早く認めていた。ブルジョア民主主義が確立しているという理由で以って、これら両国での“平和革命”を認めるとすれば、ヨーロッパ諸国でも、ブルジョア民主主義が確立された場合には議会を通じての革命が可能だという帰結になる筈である。一八七〇年代のエンゲルスはしかし、労働者階級が国会に進出していくよりも早いテンポで革命的な危機が訪れると予測していた。／マルクス・エンゲルスは、ロシアに革命が迫っていること、このロシアの革命を契機にして全ヨーロッパの解放が闘いとられるということ、このことを確信していた。」90P・・・ロシアに「革命」は起きた、しかし全ヨーロッパには波及しなかった。そしてロシア革命の“変畸”も顕わになった。

「第二章 「第一段階」から「第二段階」へ／第一節 老エンゲルスの遺した問題」

「・・・・・・・・ドイツ社会民主党は、新しい階級の特権や特典のために闘争するのではなく、階級そのものの廃絶のために、国籍や性別や出身などによる差別のない平等な権利と平等な義務のために闘争するものであり、今日の社会の内部においても、あらゆる種類の搾取と抑圧に対して闘う。」(カウツキーの手になる『エルフルト綱領』の諸命題の一つ)99P・・・差別を総体的とらえ返そうという観点があります。「抑圧」の後ろに「排除型の差別」があるので「と排除」の文言を入れるか、「抑圧」の代わりに「差別」と入れることが必要。

「エンゲルスは、ここで、市街地の構造の変化や交通機関の発達、兵器の高度化と改良、その他の諸条件が、叛乱者側にとっていよいよ不利になっていることを指摘したうえで、次のように自問自答する。／「・・・・・・・・将来の市街戦は、こうした不利な状況を他の諸契機で埋め合わせた場合にのみ勝つことができる。・・・・」106P・・・武装蜂起—権力奪取—プロレタリア独裁権力の樹立というコース自体のとらえ返しが必要なのですが、この問題は反革命クーデターへの対処問題としては、必要になってくること、韓国におけるクーデター未遂事件からのとらえ返しとしても、検証していく必要

「第二節 第二インターと修正主義路線」

「ベルンシュタインの主張は、帰するところ次の四項目に整理・・・・・・・・第三に、民族的利害を現実主義的に考慮すべきことの主張である。プロレタリアートには祖国がないといわれ、インターナショナリズムが建前として唱えられるにせよ、世界革命の同時的遂行が現実性をもたない現状では、フランス革命におけるジャコバン党の政令にみるごとく、ドイツ社会党も民族的たらざるをえない。しかも労働者階級は、もはや、経済的・社会的・政治的に、一定の失うべきものを持ちはじめしており、民族的利害に無関心ではおれない歴史的現実のもとにある。・・・・・・・・」120-1P・・・まさにこの論理が運動を革命を潰す論理になっている。今日のグローバルゼーションが世界を覆った時代にあって、民衆の窮乏化は進んでいます。

「ドイツ社民党では、マッセン・ストそのものの反対するものは一部に限られていた。ベルンシュタインですら、反対しなかった。党そのものにおいては、この(マッセンスト)戦術の位置づけをづけをめぐって意見の対立があったにすぎない。すなわち、議会主義を前提にしたうえでの恫喝として認めるか、それとも、権力奪取に向かう基本的な戦術として採用するか、対立点はここにあった。・・・・・・・・」125P

「ゼネラル・ストライキは、まだそれでは権力の問題をただ提起するだけであって、解決にはならない。権力の獲得には、ゼネラル・ストライキのうえに武装蜂起を組織する必要がある。ローザ・ルクセンブルクの全発展は確かにこの方向へむかっていた。だが、彼女は、その最後の言葉、あるいは最後から二番目の言葉をすら語らないうちに、舞台から去ってしまった」(トロツキーの一九二四年のことば)126P・・・ローザはむしろ情况分析を誤ったドイツ共産党の武装蜂起にひきづられ、殺害されたのでは？

「・・・・・・・・ドイツ社会民主党は、こうして、現実の運動においては修正主義の路線に陥りつつ、そしてタテマエのうえではあくまでマルクス・エンゲルスの古典的な諸教義を墨守し、自己の思想を、そしてエルフルト綱領の最大限綱領を空洞化させていった。」126-7P

「「正当派」のごとく歴史的な状況の変化に眼を覆い、教条の復唱に終始するとき、理論的・思想的な“風化”は必定であって、いやしくも運動を続けようとする限り、結局は歴史の現実には押し流されざるをえない。「正当派」の代表的な指導者であったカウツキーがついに修正派に屈伏したこと、さなきだに第二インターナショナルが“崩壊”せざるをえなかったことは、それを象徴的に表現したものにはほかならない。」128P・・・「正当派」批判

「ドイツ社会民主党に限らず、帝国主義諸国の議会主義政党は、選挙民の支持を確保するためには、どうしても“祖国防衛主義”を自らも掲げざるをえず、加速度的に体制にのめりこんでいった。／この間を示す一齣を、フォスターの「三つのインターナショナルの歴史」(インターナショナル研究会訳)の雄弁な筆致を借りて一瞥しておこう。・・・・・・・・」129-30P・・・そもそも国家主義的なところへのとらわれ、「国家の幻想共同体」規定の欠落

「第三節 レーニン主義と革命性の復興」

廣松さんのレーニン主義の押さえ4点——「第一に、暴力革命論の復権」「第二に、資本主義体制の「破局」の必然的な到来をあらためて確説したこと」「第三に、プロレタリアート・インターナショナリズムの回復」「第四に、中間的諸階層との積極的な同盟の理論」142-4P・・・そもそも農民に基盤をもたず、他党派解体戦略を展開したのだから「同盟」にむしろ失敗したのでは？ プロ独論自体の問題性

「レーニン主義は、その革命路線と相即的に、前衛党論、組織論をも再編した。・・・・・・・・」144P

「レーニンの組織論は、それが第二インターナショナルの議会主義に見合う組織論と相違するだけでなく、マルクス・エンゲルスのそれとも了解を異にすることを看過できない。・・・・・・・・前衛党はその思想的純粋性を組織的にも保証維持しつつ、広汎な労働者大衆に階級意識を「外部注入」すること・・・・・・・・」145P

「“主要打撃”論」146P・・・「第四の同盟」144Pとの矛盾

「このレーニンの路線の実践的現実性を立証することになったもの、それがロシア革命の成功であった。・・・・・・・・」147P・・・社会主義の定立に失敗したのだから、「成功」とは言えない、むしろ共産主義運動の桎梏となった。

「第三章 「第二段階」から「第三段階」へ／第一節 第三インターとその適合不全」

「レーニンは、しかし、永続革命論のシェーマだけは依然として堅持したものと思われる。・・・・・・・・」156P・・・永続革命論の中味をとらえ返す必要

「第三節 新左翼革命運動の課題と位相」

「・・・・・・・・資本主義の「段階」規定は、そもそも具体的な歴史的総体としての資本主義の構造的定在に即しておこなわれるべきものであって、純粹に経済学的な規定ではないはずである。現にレーニンにおける段階規定もそうであったし、そのことにおいてまた、それは実践的有効性をもちえたのであった。マルクス主義者は、今日レーニンの故知に倣うべきであろう。」188P・・・・レーニン主義の宣揚？ 帝国主義論やローザの継続的本源的蓄積論、ネグリ／ハートの「<帝国>」におけるグローバリゼーション、ファシズム論なども含めてとらえ返すこと。

「現代資本主義の経済的・社会的・政治的メカニズムを分析し、その段階的特質を論定する作業は、・・・・・・・・現代資本主義のもとでは、革命路線をどの方向で再構築することが歴史的に要請されているか、臆断をおそれず幾つかの論点を挙げることにしたい。／第一に、「破局」の自動的な到来を大前提にせざる戦略を構築すること。・・・・・・・・／第二に、革命的ゲヴァルトの新しい組織形態を創出すること。・・・・・・・・／第三に、生産の場に立脚した労働者階級の自己権力と革命的議会主義との結合。・・・・・・・・」188-91P

「第二部 新左翼運動革命理論の課題状況／第一章 資本主義の“変貌”と現代革命／第一節 資本主義体制批判の視角」

エンゲルスの『エルフルト綱領』の中での。これまでの綱領のとらえ返し208-11P・・・・ポスト・グローバリゼーションの時代の更なる変化

「第二節 現代資本主義の“変貌”」

「恐慌はどうか？ 軍事スペンディングをはじめとする資本と労働との大量的浪費を不可欠の前提とした——この意味で——原理的には縮小均衡によって、恐慌が辛うじてコントロールされていることは多言を費やすまでもあるまい。恐慌という爆発的な価値破壊が浪費的なスペンディングという恒常的な価値破壊で置換されただけであり、ここでもまた、資本関係そのものが可能的生産力の桎梏になるという矛盾が厳然として存続し、いよいよ尖鋭化している。」218P・・・・今日の軍拡路線

「・・・・・・・・レーニンは『迫り来る破局、それとどうたたかうか』のなかで、「社会主義は、全人民の利益に奉仕するようになった。……国家資本主義的独占にほかならない」。「社会主義は、国家資本主義的独占からの唯の一步を進めたものにほかならない」と書いている。今や問題は、主体的条件である。」223P・・・・唯物史観を踏み外している、資本主義的關係性の中で、主体がどう形成されるのか？

「第三節 現代資本主義と共産革命」

「勤労大衆の絶対的窮乏化、失業者群の増大と被救恤(きゅうじゅつ)民化、経済恐慌の周期的爆発、等々が、もはや、古典的な現象形態をとって定在しなくなったところから、革命論にとって幾つかの重大な問題が提起される。／第一は、労働者大衆の日常性への埋没からいかにして脱出しようかという問題である。・・・・・・・・／第二に、社会主義社会のヴィジョンが問い返される。・・・・・・・・／第三に、革命の客観的条件との関係で問題が生ずる。・・・・・・・・」224-6P・・・・相対的窮乏化の問題があり、また、帝国主義からポスト・グローバリゼーションの時代の資本主義は継続的本源的蓄積なしには存続し得ないところで、差別の強化・差別主義的なところが繰り返して起きてくるし、体制を維持するために、

戦争の危機を煽り続け、軍拡路線に踏み込み、福祉の削減などで、むしろ民衆の生きがたさはなくなっていくどころか、増してくる。

「・・・・・・・・生産力水準の飛躍的な上昇という前提のもとで、未来社会においては、効率よく組織化された中央管理社会ではなく、むしろ効率＝産業合理主義を第一義とせぬゆとりある社会が現出する筈である。・・・・・・・・」 232P・・・そのためには、悪無限的に利潤を追求する資本主義を止揚さなければならない

「・・・・・・・・今日では、いよいよ、下からの労働者自己権力の運動が絶対的に必要である。・・・・・・・・」 236P・・・その一形態としての協働・協同組合的運動

「第二章 旧左翼の隘路と新左翼のコース」

「・・・・・・・・しかも、かくのごとき労働者階級の体制外在化的覚醒は、改良主義的・経済主義的闘争のつみあげ自体によっては決してもたらされるものではなく、前衛的部分が体制そのものに対する最大限綱領的批判を不断に、系統的に「外部注入」することによってのみ実現することができる。」 257P・・・労働者にも自ら抱える差別の問題があり、反差別の闘いから総体的に差別をとらえ返すことによって、闘いの主体は「外部注入」ではなく形成されうる。

「第三章 武装大衆叛乱型革命路線の模索」

「・・・・・・・・先進国革命の現実的展望を拓きえんがためには、破局的な大恐慌や帝国主義間戦争といった“自動崩壊的”な破綻を前提としないところの革命論が構築されねばならない。大恐慌や世界戦争の可能性は依然として存在するのであるから、この種の破局が来ないと断定するわけではないが、しかし、その必然的な到来を大前提にしない革命論を構築しなければ、いたずらに危機を待望して蹶起の時を失すること必定である。」 280P・・・ファシズムとの対峙論的なとらえ方も必要

「・・・・・・・・当の闘争の現実的可能性は、単なる目的意識的な組織化によって拓けるものでなく、それ自体、恐慌の爆発という形はとらないにせよ危機的な様相が現出する循環局面、社会経済的構造の位相転換局面という——物象化されて法則的な推移をみせる——客観的な条件と相俟たねばならない。・・・・・・・・」 281P

「・・・・・・・・拠点における目的意識的な先駆的突出闘争を槓杆にして推進しようと図ったもの、それが拠点山猫型マッセン・ストの構想であるということができる。」 287P

「付 「疎外革命論」の超克に向けて」

「疎外革命論の主張には、なかんずくスターリン時代を通じて教条化され硬直化してマルクス解釈へのアンチテーゼとして当たっている点もあり、幾つかの新しい問題提起もみられる。・・・・・・・・」 297P

「・・・・・・・・ゲーテその他によって独訳され、ヘーゲル派で定着した語義に目を向けよう。そのとき「疎外」が特別な主体概念と不可分であることは誰しも気付く通りである。ヘーゲルにおいては彼のいわゆる「精神」が当の主体概念であった。ヘーゲル左派においては、この「精神」が改竄ないし転置されて、シュトラウスの「人間性」。バウエルの「自己意識」、フォイエルバッハの「類的存在」となった。・・・・・・・・」 300-1P

「・・・・・・・・ドイツ古典哲学と古典派経済学とフランス社会主義との総合的統一を媒介にしたもの、それが中期ヘスの一連の論稿と初期マルクスの『経哲手稿』にほかならない。」

「・・・・・・・・マルクス・エンゲルスはまさしく真正社会主義の疎外革命論を克服することによって「科学的社会主義」を確立しえたということ、現代の疎外革命論者たちは、真正社会主義や聖マックスの革命論の域を一步も出ていないどころか、そのミニチュア版にすぎないということ、それはマルクス・エンゲルスによって批判的に克服されているのだということである。」336P・・・後の「科学主義」批判

「常識的な意味での疎外論——これですら結局はある哲学的人間観と不可分であり、哲学的疎外論の俗流版なのだが——それは記述概念としてしか許されず、原理的な説明概念とはなしえない。哲学的な意味での疎外論、それは依って以って立つ主体概念の難点の故に——そして語の本来の意味におけるイデアリスティッシュ・イデオロギッシュな性格の故に——維持されがたい。・・・・・・・・」337-8P

たわしの読書メモ・ブログ 735 [廣松ノートⅡ— (3)]

・廣松渉『新左翼運動の射程』ユニテ 1981

廣松さんの運動論・革命論の「三部作」の二冊目です。一冊目で流れを押さえ、対話の主題的なことは、この読書メモを載せる「反障害通信」の巻頭言に書いています。前のメモにも書いたように、これは前のメモの本と時期が重なる文があるのですが、前のメモは1970年までですが、ここには、60年代の文が一つ、70年代中期・後期の文4論攷があります(年が書かれていない文が一つ)。中期・後期の文には、必ずしも「マルクス・レーニン主義」ではない左派理論との対話の試みがあります。

まずは、目次から。

目 次

第一章 情況と新左翼の位相

第一節 人類史的危機と変革主体の混迷

第二節 新左翼の思想

第三節 根本理念の再確認から始めよ

第四節 産業主義イデオロギーを超えて

第二章 マルクス主義革命論の原像

第一節 フランスの二月革命と永続革命論

第二節 『共産党宣言』と『回状』との視差

第三節 ドイツ革命の展相と若干の追体験

第四節 『回状』における永続革命論

第三章 マルクス主義の歴史的状況

第一節 マルクス主義の第三段階

第二節 大衆運動の物象化と前衛の問題

第四章 プロレタリア独裁の問題

第一節 マルクス主義と「プロ独」の問題

第二節 プロレタリア独裁論の歴史的基礎

第五章 全共闘運動が語るもの

第一節 東大闘争の現代史的意義

第二節 「壮大な零」に終わったか

初出一覧

編者附録 廣松哲学の諸論点 小林敏明

著作年譜 編集部作成

さて、切り抜きメモです。前のメモと同じように備忘録的に簡単に書き遺します。対話
というか、問題提起を「・・・」の後に斜体文字で貼りつけます。

「第一章 情況と新左翼の位相／第一節 人類史的危機と変革種体の混迷」

「・・・・・・・・全人類が高度な産業文明を機会均等的に享受するためには、全世界規模で
の計画的に統制された経済生活が要件をなす。・・・・・・・・」 6P

「論者たちは、産業社会の必然的な疎外の第一として、労働生産物の疎外、すなわち、労働
主体各自の創出した生産物が当人の所有に属さないという事態を挙げる。・・・・・・・・」
7P・・・「労働主体各自の創出した生産物が当人の所有に属」するーロック、そもそも協働
的に作られた物はみんなのもの

「論者たちの立論は、しかし、所詮は小市民的な人間像の危機、ないしは、小商品生産者
の在り方を理想化し、それを以って人間の本来の定在とみなすイデオロギーの危機にすぎ
ないのではないか？」 8P

「・・・・・・・・全労働の収益を以って人間存在の本来の在り方とみなし、それが保証さ
れぬことを以って直ちに人間疎外を云々する論者たちの立論には十全な権利根拠が欠けて
いるという点である。全労働の収益を以って本来のとみなすのは特殊歴史的な価値判断で
あり、小市民的な存在拘束性をもったイデオロギーにすぎない。能力応じて働き、必要に
応じて配分される生産・消費の共同体、これこそが社会的動物たる人間にとってむしろ“本
来的”と言われるべきであろう。」 9P・・・“本来的”という設定自体が物象化。廣松さん
は『存在と意味』において、協働的連関態という概念を突き出していて、そこからとらえ
返すと、むしろ、「能力」ということ自体が「コモン」としてとらえられることで、協働に
よって作られた物も、コモンとなります。

「・・・・・・・・社会的生産の分業的編制、地位と部署が、階級的・身分的に固定化されること
なく、機能的・流動的な役割分掌として配位され、各人が社会的要請と能力に応じて主体的にア
ンガージュする態勢が確立されれば、労働工程が即事的には一定の苦痛を伴うにしても、労働へ
の参与が一種の悦びとなること、このような共同体的協働が実現されうことは決して単なる夢
想ではあるまい。・・・・・・・・共同体的な協働を形成する基礎的条件としては、役割相互間に矛盾
がなく、全体的利害と個々人の利害と個々人の利害とのあいだに決定的な背馳がなく、各人が
役割期待に呼応しうること、このような契機を数えうる。階級的・身分的差別の固定化を許さず、
総社会的な生産過程が有機的・可塑的に役割編成される場合、当該の高度産業社会は生産の場
におけるゲマインシャフトリッヒな編制を十全に可能ならしめることと念う。」 10-1P

「・・・・・・・・われわれとしては、「社会主義・共産主義の段階においても高度産業社会たるかぎり人間疎外が昂進する」という論者たちの断案、この「人間存在危機論」には必然性がないということの論決を許される筈である。」 11P

「・・・・・・・・(前二項を押さえ)ここに要請される計画的管理体制は「高度産業社会に必然的な人間疎外を伴う」がゆえに“人間存在の危機”が愈々昂進する」と案ずる一部論者の先決要求に鑑み、共産主義的なゲマインシャフトの建設によって、且つそれに俟つてのみ、当の“危機”が解消されうること、とりあえずこの点まで論断しておいた。／社会的物質代謝過程の高度に組織化された統括体制と人間関係の共同社会的編制との協和的統一を現実化することが今や実践的な課題となる。」 12P

「・・・・・・・・資本主義社会にあつては、労働者といえども職場外の日常生活では万人“平等”な“市民”であり、まさにそのような“市民”のキャッシュ・ネクサス(金銭関係—「金に支配される社会」)で成立するゲゼルシャフトになっており、この状態に安住するかぎり、共産主義的なゲマインシャフトの展望は出てこない。・・・・・・・・」 13P・・・差別の問題を抜け落としている

「・・・・・・・・資本主義社会の体制下の日常的存在からして、論者たちの求めるごとき意識性が広汎な大衆のあいだで即自的に形成されることは元来望むべくもない筈であり、蓋し茲に前衛的部分による「階級的意識覚醒」の系統的活動が要請される所以である。論者たちの謂う“変革主体の危機”は、慥かに、与件的な一事実であつても、主体的に受け留め返さるべきであらう。・・・・・・・・」 13P・・・被差別の問題の前衛は被差別当事者民衆であり、そこから、階級問題に演繹することによって、「階級的覚醒」に到達しう。

「“農村収奪”」 14P・・・「都市—農村」(産業差別)、「中央—地方」これも一つの被差別問題

「・・・・・・・・ソ連邦という負のサンプルを以って将来的な社会主義一般に推及する“悲観的”な論議に対しては、是を厳しく卻ける次第である。」 15P・・・そのことを実践的になしていくには、「前衛党論」や「プロ独」概念とか、レーニン主義とか、ロシア革命が「社会主義の定立」に失敗したこともきちんととらえ返すこと

「・・・・・・・・一種独得の後進国型“国家独占資本主義”を現出している。・・・・・・・・」 16P・・・ボナパルティズムと言われること

「“チリ型”」 18P

「第二節 新左翼の思想」

「資本主義社会体制に対する革命的アンチテーゼとしての社会主義運動の歴史は、従前のところ、「マルクス主義」が名実ともにその主流をなしてきた時代とそれ以前の時期とに、すなわち、前マルクス主義の時代と大きく分けることができよう。新左翼は、この「マルクス主義」の時代につづく、第三の時代の到来を予兆するものであるように看ぜられる。」 21P・・・前マルクス主義——「マルクス主義」(サルトルのいう「乗り越え不可能な思想」)——マルクス・レーニン主義と西欧社会民主主義(両者とも“変畸”せる「マルクス主義」)、「マルクス・レーニン主義」の「新左翼」でない、新左翼は存在したのか？ 存在し得たのか？ レーニン主義のとらえ返しの必要性

「マルクス主義が社会主義運動の主流としての地位を確立したのは、すなわち、「マルクス

主義」の時代が始まったのは、マルクスの死後、第二インターナショナルの前半期を通じてであった。前世紀の末から今世紀の初めにかけてのこの十数年の時期は、資本主義諸国で一斉に労働運動の波が高まり、マッセン・ストライクが席卷した時期でもあった。この運動は必ずしもマルクス主義者が指導したものではなかったが、その過程で、マルクス主義が指導的理念としての権威を確立することになった。・・・・・・」 22P

「「公民」(シトワイヤン)」—「松本礼二」 23P

「管理社会の即自的な組織性に対する人間の名における告発と叛乱は、しかし、それにとどまる限りでは、「マルクス主義」以前と評されざるをえない。謂うところの疎外、いな、「管理社会」「官僚制」ひいては「国家権力」等々、経済機構・政治機構、市民的・公民的秩序となって現前するところのものは——単にハンマーで粉碎しうるとき物在的な自存者ではなく——今日的条件下における人々の営為の物象化なのであり、これを革命的に止揚しえんがためには、この「物象化」のメカニズムを今日的現象形態に即して具象的に究明する必要がある。・・・・・・」 31-2P

「・・・・・・「チェコ革命」に際して『二千語宣言』の中心メンバーであったと伝えられる哲学者カレル・コシークは・・・・・・」 33P

「コシークはこの似而非具体性の世界が成立する物象化のメカニズムを究明することによってそれを実践的に止揚する方策を探求する。右に一端を紹介した立論は、彼の哲学にとって第一階梯をなすものにすぎないのであるが、大よその消息は推測していただけるであろう。」 35P

「ハイデッガーの謂う「世界像の時代」の拠って立つ基礎そのものを対自的にとらえ返し、物在的(「フォルハンデン・ザイン」のルビ)な世界像のみならず、用在性(「ツーバンデン・ザイン」のルビ)な世界そのものをも、商品経済世界における人間の“存在被拘束的(「ザインスゲヴンデン」のルビ)”実践の在り方によって媒介されたもの、その「物象化」Versachlichung として了解していく世界観的な構え——そこでは大衆闘争そのものの進展も、その自己の思想的営為すら、“半不透明”に物象化された相貌で現われる！——、新左翼の思想家たちは、哲学的世界観の次元において、このような了解の構えに立って思想形成を進めつつあるように看ぜられる。」 36P

「第三節 根本理念の再確認から始めよ」

「真木悠介氏」—「<最適社会>か<コミュン>か」 38P

「しかしながら、自由・平等・友愛という市民革命のイデオロギーの単線的な延長上に社会主義を位置づけるのは、思想史上の事実に合わない。社会主義たちは、初期以来、「万人の自由」と「万人の平等」とは——啓蒙主義的ブルジョア・イデオログが説くように——単純に調和するものではないということを自覚していた。・・・・・・」 43P

「共同態的なニュー・モラルワールドの理念」 43P

「・・・・・・総じてみると、社会主義の理念にとって、<コミュン>型の意想が根底に置かれていることが一応認められてしかるべきであろう。」 44P

「マルクス・エンゲルスは、やがて、淳朴な<コミュン>主義を止揚しつつ「科学的社会主義」の新地平を拓いた次第であるが、そこにおいても無論コミニズムが更めて定礎されているのであり、本稿の論脈でいうかぎり、真木氏の謂う<コミュン>型の理念が堅持

されている。」 44P

「……『ドイツ・イデオロギー』において「労働の廃止」が説かれる所以である。……」

48P

「……『ゴータ綱領批判』に見られるとき二段階の区分が論定される。」 48P・・・

内容は 48-9P

「……必然の王国から自由の王国への人類の躍入である」 —エンゲルスの引用 50P

「社会主義・共産主義の理念は、前項においてその一端をみたように、マルクス・エンゲルスの場合、単なる社会変革的次元に止まるものでなく、謂うなれば存在論的次元まで射程の及ぶものであった。……」 50P

「……また、恐慌や失業という資本主義社会の構造的矛盾の解消策として「経済の計画的な管理と制御」が当為として意識されるようになり、社会主義運動の本来的理念にとっては手段的必要条件たるにすぎないこの契機が、あたかも目標であるかのごとき思念を生ずる所以となった。」 51P

「マルクス主義は、国家の即時的廃止を説く無政府主義の非現実性を斥けつつも、国家の漸次的死滅を展望・志向するものであり、過渡的なプロレタリア独裁権力の必要性を意識しつつも、所謂プロレタリア的民主主義を当の過渡的権力と相即的な政治形態として了解するものであるが、始祖達も後継者達も、その動態についてはまだ必ずしも詳らかにしていない。……」 52P・・・プロ独論—標語だけのひとり歩き

「しかしともあれ、近代的「市民社会」のイデーにみられるとき実体の諸個人を前提した予定調和的な自由・平等が不当前提の悖理である以上、従って、ゲゼルシャフト的編制のもとではたかだか<最適社会>を期しうるにすぎない以上、<コミュニオン>型の大理想を懐く者にとって当の大命題を社会科学的に基礎づけることはまさに理論的当為である。」

53P・・・アトム的個人というブルジョア思想、マルクス・レーニン主義的新左翼の陥穽、廣松さんの「協働的連関態」という概念から、コモンということを押さえ<コミュニオン>論へつなげる

「……先進資本主義諸国のマルクス・レーニン主義党は、……爰において、運動論的には先進国革命の現実的戦略・戦術の再構築が確かに先決要求をなしている。」

54P・・・反ファシズムの反・国家主義と反・差別主義から再構築していくこと

「第四節 『回状』における永続革命論」

「ルカーチと並ぶ「西欧マルクス主義」の泰斗カール・コルシュは、……」 57P・・・非マルクス・レーニン主義との対話

「マルクスは『ゴータ綱領批判』以前には、右の如き二段階区分はおこなっていなかった。彼が「共産主義」の社会を論ずるさい、これ以前の時点では、最初から右の第二段階に近いイメージであった。……」 64P

「“物質の狡智”」 68P

「(未来社会においても勿論「機能上の分業」を廃止するわけにはいかない。だが、各人が“全人的陶冶”を遂げているところでは、役割の分業が、管理者と被管理者、上司と下僚というように属人的に固定化される必要はなくなるであろう。因みに、マルクスの謂う「自由人の連合」、この将来的ゲマインシャフトの完現は「固定化された分業の廃止」を要件

とする！)」 68-9P・・・「機能上の分業」＝役割分掌

「・・・・・・・・プロレタリア独裁の権力下において官僚主義的管理社会化に堕することなく如何にして社会主義建設を推進するかの方策論、・・・・・・・・」 69P

「第二章 マルクス主義革命論の原像／第一節 フランスの二月革命と永続革命論」

(『回状』)「・・・・・・・・プロレタリアートとその前衛の任務は「少なくとも決定的な生産力がプロレタリアートの手に集中されるまで革命を永続させることである」と規定し・・・・・・・・」 73P

(マルクスの言)「・・・・・・・・彼らの階級利益を明らかに理解し、できるだけはやく独自の党的立場を固め、一瞬間といえども民主主義的小ブルジョアの偽善的な空文句にまよわされずに、プロレタリアートの党の独立の組織化を進めなければならない。彼らの戦いの闘いの声はこうでなければならない——いわく永続革命！」 85P

「第三節 ドイツ革命の展相と若干の迫体験」

「革命家は謙虚に自己批判する。そして真の自己批判とは、正しい方針を持出し、それを実践することである。」 108P

「第四節 『回状』における永続革命論」

「ここには共産党の時代に比べて或る姿勢の変化がみられることは、あらためて指摘するを要せぬであろう。しかも、マルクス・エンゲルスは、ウィーン蜂起の敗北の経験に学んで、「革命的テロリズム」(VII.S.457)という手段を積極的に評価するようになっている。・・・・・・・・」 111P

「特に注目すべきは、マルクス・エンゲルスが、二重権力状態を即刻につくれと呼びかけてている事実である。・・・・・・・・」 113P

(『回状』)「・・・・・・・・一七九三年のフランスでそうであったように、今日のドイツでも、最も厳格な中央集権化を実現することが真の革命党の任務である。」 117P

「・・・・・・・・『宣言』においては宛かも自然成長性に委ねるかの趣きがあったのに対して『回状』では、前衛的部分の独自の結集、運動の動力学の真只中に自らを投ずることによるヘゲモニーの拡充、主要打撃との関連性のもとにおける運動のキャナライズ、といった契機が目的意識的に措定されていることである。」 118P

「前衛による一元的な階級形成とその指導による大衆操作主義的な階級決戦という発想ではなく、あくまで、それ自体も物象化されて自己運動するところの大衆闘争の動力学にふまえつつ、そこに現出するであろう諸派のヘゲモニー争奪の予料のうえに立って、当の渦中に自からアンガージュすることによるキャナライズということ、『回状』ではこの基本的な構えが貫いていることをわれわれは確認しうる。」 118-9P

「この際、『回状』での——一たんは不可避免的に成立する小ブルジョア急進主義的民主派の政権を下から押し上げつつ、武装せるプロレタリアートを実体とする二重権力状態を形成し、革命を永続化して中間左派政権を左翼的に乗り超えることによるプロレタリア独裁の確立という——シェーマとそこでの暴力革命路線が次の了解と相即していることはあらためて絮言するまでもあるまい。」 119P

「・・・・・・・・史上最大の革命的策謀家ダントンの金言を藉りて言おう。大胆なれ！ 大胆なれ！ 重ねて大胆なれ！・・・・・・・・」 119P

「第三章 マルクス主義の歴史的問題状況／第一節 マルクス主義の第三段階」

「マルクス主義が殆んど全面的といってよいほどの“適応不能症”に陥ったのは、歴史上、今回がはじめてではない。前世紀の末から今世紀の初めにかけて、マルクス主義は二十数年のあいだ、レーニン主義に再生するまでの一時期“死の苦悶”を経験したのであった。」

121P・・・「レーニン主義に再生」？ オールド・ボルシェビキとしての廣松さん

「この論争(「修正派」と「正当派」との論争)は、その後十数年の苦節をへて、レーニンとその同志たちによって弁証法的に止揚されるのであるが、・・・・・・」 122P・・・「弁証法的に止揚」？—「止揚」しようとして変畸」

「・・・・・・レーニンとその同志たちは、マルクス主義の原理的な思想性を堅持しつつも、帝国主義段階という新しい歴史的社会的諸条件に対応すべく、マルクス・エンゲルスの思想を継承的に発展せしめたのであった。」 125P・・・「マルクス・エンゲルスの思想を継承的に発展」—帝国主義論としては「継承的に発展」とは言い得るにしても、ローザの「帝国主義論」としての「資本蓄積論」に留意

「われわれは、もとよりマルクス・エンゲルスの理論に関するレーニンの解釈が唯一絶対に正しかったとか、レーニンによる継承的發展が完全無欠であるとか、この種の立言を敢てするつもりはない。事の眼目は、マルクス主義がレーニンとその同志たちによって、帝国主義段階の世界資本主義に対処しうる形に再編され、新しい発展段階に引き上げられたということの確認にある。」 125-6P

「・・・・・・晩年のマルクス、特にエンゲルスは、市街戦による勝利がますます困難となる歴史的条件の発生、普通選挙権の獲得によって議会で多数を占める可能性の成立、これらの両面の事実に立脚して、議会・選挙を軸とする戦略構想を提示しており、第二インターの主流はこの路線を絶対化しつつあった。これに対してレーニンとその同志たちは、帝国主義戦争期においては、一方で議会の空洞化が生ずることによって議会的勝利が閉ざされること、他方では戦争と戦後の混乱期に市街戦による勝利の現実性が保証されること、要言すれば暴力革命の可能性と必然性が客観的に定立されるに至ったことを洞察し、これにもとづいて革命論を構築したのであった。」 127-8P・・・そもそも「民主主義」的な戦略をとっているところに、暴力革命での権力奪取が波及していくのだろうか？

「・・・・・・これに対してレーニンは、帝国主義の時代には広汎な大衆が体制に内在化する物質的・イデオロギー的条件が成立していることを洞察し、カウツキ的な外部注入論を止揚しつつ、かの有名なレーニン主義的外部注入論を定礎し、さらには新しい戦略戦術論とも見合う形で、新しい組織論、新しい前衛党論を仕上げたのであった。」 128P・・・

「外部注入論」 「前衛党論」 自体の見直し・とらえ直しの必要性

「・・・・・・かつてレーニンとその同志たちが拓いた歴史的第二段階を今一度止揚して、現代資本主義の新しい発展段階に対応する「マルクス主義の第三段階」を開くべく歴史的に要請されている。」 133P

「しかし、マルクス主義は、ブルジョア社会をトータルを超える思想として、まさしくブルジョアイデオロギー一般の地平と異質な、そしてそれを端的に超越する地平を拓くことにおいて成立したのではなかったか？ しかるに“マルクス・レーニン主義者”たちは、爾来、マルクス主義の拓いたこの新しい地平を見失ってしまっている。われわれはこの悲喜

劇的な現状を看過できない。」135P・・・“マルクス・レーニン主義者”という廣松さんのとらえ方

「第二節 大衆運動の物象化と前衛の問題」・・・この節自体が前衛党論の批判になっているのでは？

「一 前衛—大衆という図式の陥穽」

「前衛—大衆という発想も、現代社会の存在拘束性によって、ともすればこの驕慢な「主体—客体」図式に陥る。」137P・・・そもそも、「主体—客体」図式や二項対立図式自体の批判もあったのに、なぜ、廣松さん自身が、前衛党論に陥ったのか？

「二 マルクス・エンゲルスの姿勢」

「唯物史観を確立して以後のマルクス・エンゲルスは、歴史はいかに人間の営為、各自の意識を伴った営為によってつくられるとはいえ、この営為が物象化して現われるということ、個々人の思想とは独立に、あたかも固有の法則性をもってそれが自己運動することを知っており、啓蒙主義的発想の地平を越えていた。」141P

「・・・・・・前衛的グループの活動というものも、総体としては物象化された姿態で進展する大衆運動のダイナミズムの一契機という以上のものではありえない。前衛的グループは、たとえ意識のうえでは大衆運動の現状を超えているにしても、物象化されて進展する運動の、構造内的一契機という以上のものではない。前衛と大衆との機能的関係は、このことの対自的自覚のうえに立って措定されなければならない。」142P

「三 物象化された協働と政治力学」

「・・・・・・前衛と労働者大衆とのあいだには、なるほど原理的には、対自的な協働が成立可能だということが前提になっている。しかし、それぞれの時点では、まだ真の対自的な協働は成立していない。けだし、もしも真に対自的な協働がすでに成立しているのであれば、大衆はもはや大衆ではなく、前衛グループに属するはずである。いな、もはや前衛—大衆という関係性が止揚されているはずであって、前衛グループと大衆という関係が存立するかぎり、そこでの協働はまだ即自的契機を含まざるをえない。このゆえに、前衛グループは、可及的に多数の大衆とのあいだに高い次元での目的意識の共有化、つまり、対自的な階級形成を不断に追求しつつも、環境の条件の変様を槓杆とする“水路への導入”という契機を没却するわけにはいかない。」145P・・・「障害者運動」において語られていた、「水先案内人」という概念と共鳴、ただし、大衆たる「障害者」は前衛ではなく、何も語らないでも、その存在によって、「水先案内人」になりうる。

「四 前衛と対自的な協働の組織化」

「マルクス・エンゲルスは『回状』の永続革命論において、真のプロレタリア的前衛はさしあたってはまだ政治的ヘゲモニーからは程遠いということを自覚的にとらえたうえで、物象化された相で進展する対象運動の構造内的一契機としての自己が、その存在において、総体としての政治力学の左方移動にいかにかンガー・ジュするか、これを明確に規定している。そこでは、組織論としての前衛党論が明確な形で説かれているわけではないが、そのための基礎的な視角をわれわれは読み取ることができる。」146-7P

「・・・・・・自己を手段化的に投企することによって逆に他者を手段化する配備——『回状』ではこれが方針化されている。」149P

「・・・・・前衛とプロレタリア大衆の対自的協働が成立すること、プロレタリア大衆を「主体われわれ」として形成することと相即するわけであって、その局面にいたってはじめて、前衛—大衆という当の矛盾構造が広汎な大衆とのあいだで自己止揚される。けだし、そこにおいてはじめて、協働が即自対自的になるからである。」 149P

「プロレタリア革命の前衛は「階級闘争を廃絶すべく階級闘争を戦い、政治を止揚すべく政治に挺身するという矛盾」を生き、前衛—大衆という構図を廃棄すべく、従って、前衛の存在を止揚すべく存在するという「自己矛盾的存在」として、自己否定を自己の存在規定とするわけであるが、この前衛の自己否定、前衛組織—大衆という構図の実践的止揚は、決して啓蒙による同心円の拡大を通じての大衆—の消尽によってではなく、—マルクス・エンゲルスの構想したごとき仕方での、即自的協働の政治力学への、前衛的集団の主体的アンガージュマンを通じて実現される。」 149P

「革命という大衆的な対自的協働、協働の対自的組織化の地平は、前衛集団の不断の自己手段的・自己否定化的な投企という構造内的契機を対自的能動因としつつ物象化された協働の弁証法的展開を通ずることによってのみ、はじめて現実のものとなる。」 150P

「五 前衛の先見性と特殊的組織化」

「・・・・・大衆運動は、経済情勢の“一価函数”ではない。それを規定する“客観的要因”——これ自体、実は、即自的協働の物象化された定在なのであるが——それは多岐多様であり、それには社会心理学的分析の対象となりうるごとき要因まで含まれる。しかし、ともあれ、大衆運動の潮汐は、さしあたり一つの与件として現われるということ、しかも昂揚の到来が間近かに迫っているということ、この来るべき昂揚にどう対処するかということが『回状』の問題意識である。」 151P・・・函数概念としての「前衛」—むしろ「後衛」。因果論ではない相関関係。

「・・・・・だが、大衆はまだそのような先見性をもっておらず、この特殊的準備と訓練は自然成長性に委ねるわけにはいかない。けだし、緊要な特殊的配備として先進的部分にそれが課せられる所以である。」 151P・・・「先進的部分」—前衛、むしろ兵站的後衛の必要

「第四章 プロレタリア独裁の問題／第一節 マルクス主義と「プロ独」の問題」

「ところが、バリ・コミューンは、“バブーフ—ブランキー”流の少数者独裁とは異質の、「真に民主主義的な」プロレタリアートの独裁を現示してみせた。・・・・・」 163P

「・・・・・ブルジョア民主主義、ブルジョア独裁にならされた“選挙民”大衆は、パリコミューンのごとき「真の民主主義」には却って恐怖することなのであろうか。」 168P・・・「ブルジョア独裁」にはファシズム論がなく、プロレタリア独裁には反差別論がない

「新左翼は、もとより、レーニン教条主義を事とするものではないが、その本流は、レーニン主義の革命性を現代的諸条件のもとで発展的に継承しつつ、スターリン主義的独裁による革命の篡奪を防止するためにも、マルクスの説いた、かのコミューン型プロレタリア独裁の構想を継承・展開しつつ、その実現を実践的に追求してやまないであろう。」

173P・・・レーニン主義自体のとらえ返しの必要

「第五章 全共闘運動が語るもの／第一節 東大闘争の現代史的意義」

「諸個人の営為の総体が物象化されて体制という“網”をかたちづくっているのであり、

各自が深くこの網の目に組み込まれている。この限りにおいて、諸個人とその営為は体制の存立にとって不断に共犯的であり、この共犯関係の総体を否定的に変革しない限り、自己を実践的に否定することはできない。ここにおいて“大学人”としてさしあたり問題になるのが、わが内なる帝国主義大学の解体と自己否定との相即にはかならない。」215P

「・・・・・・・・マルクス主義においては、人間変革と社会変革とは全く相即的である。／「革命は支配階級が他のいかなる方法によっても打倒されえないから必要というだけでなく、打倒する階級が革命の真只中でしか、しみついた古垢をこそぎ落して新社会の成員たるにふさわしい自己陶冶、人間変革をまっとうできないという理由からしても必要なのである」と喝破したマルクス・エンゲルスは「一部エリートが無自覚な大衆をその即自的な意識のまま狡智的に操縦」しようとする運動方式を厳しくしりぞけた。」215P・・・むしろ前衛党論の否定の論攷

「編者附録 廣松哲学の諸論点 小林敏明」

「・・・・・・・・マルクス主義はマルクスで終わったのではなく、むしろマルクスとともに始まったということは、まだ繰り返されてよい言葉だ。・・・・・・・・」253P・・・むしろ「わたしはマルクス主義者ではない」というマルクスの言を想起し、マルクスの思想との対話とその思想の深化こそが必要なのだと思います。

「・・・・・・・・社会は社会的諸関係なのだ。真の転倒とは、フッサール風に言うならば、個体概念はもちろんのこと、すべての実体化された「基本」概念なるものを、一旦、括弧に入れて、いわばエポケーすることである。／ところが、われわれはフッサールのように、エポケーしたあとに、自我(たとえ超越論的と修飾されようが)を残さない。なぜなら、それは近代図式の重層化、あるいは再確認にすぎないのであって、地平そのものの転換、超克にはならないからである。かといってこのエポケーは、世界に対する全面懐疑としてのニヒリズムを結果するものではない。残るものそれが「関係」である。それは単に「社会的」「歴史的」という修飾規定が付くだけでなく、すぐれて「実践的」行為連関を実相とした関係なのである。そしてまさに、この実相こそが対自化されるべきであると言えよう。」

263-4P

たわしの読書メモ・・・ブログ 736 [廣松ノートⅡ— (4)]

・廣松渉『東欧激変と社会主義』実践社 1994

廣松さんの運動論・革命論の「三部作」の三冊目です。二冊目に書いたように一冊目で流れを押さえ、対話の主題的なことは、この読書メモを載せる「反障害通信」の巻頭言に書いています。実はこの本は新訂増補版で、旧版は戦旗社(荒派)から出されていて、それに一冊目の読書メモ 734 の『現代革命論の模索』の「第二部 新左翼運動革命理論の課題状況」「第二章 旧左翼の隘路と新左翼のコース」の再掲として編集を加え「補・プロレタリア権力への道」として再掲載(こちらの方が編集されてまとめられているのですが、『現代革命論の模索』の時代区分に属するので、こちら方で読書メモを残しています)と熊野純彦「廣松渉 私記」を付けて、再発行されたものです。わたしが最初に読んだのは戦旗社版で、新訂増補版の熊野さんの文もこの本の版で以前に読んでいます。付録の「補・プロ

レタリア権力への道」は1960年代の文ですが、他は1990年代の初頭の廣松さんの亡くなる年1994年までの最晩年の文です。まさに「マルクス・レーニン主義」的なところで貫いているのではととらえています。

これは、講演録やインタビューで、ソ連邦の崩壊過程で、そもそもマルクスの思想の基本的なテーゼからとらえ返す作業として語っていて、更めて、押さえ直す作業をしています。わたしも、この間、マルクスの読み直しをしているので、その点も押さえる作業として、この本を読み、読書メモを残します。

もうひとつ、このメモをとっているときに、二〇二六衆議院選挙がありました。廣松さんのその時代がこの時代と同じようなことを繰り返しているのだとの、思いを強くしたものです。まあ、資本主義の原理は同じことを繰り返さざるをえないのですが、それを断ち切るにはどうすればいいのか、あらためて考えていた次第です。

まずは、目次から。

目 次

『東欧激変と社会主義』発刊にあたって

I 東欧激変と社会主義の行方

- 一、二十世紀末つげる世界史的構造変動
- 二、スターリンによるロシア革命の歪曲
- 三、三〇年代の危機と資本主義の“変貌”
- 四、帝国主義包囲下でのソ連経済の歪み
- 五、いまこそマルクス主義の旗のもとに

II 社会観の哲学

- 一、近代市民社会における「自由」
- 二、資本による労働者支配の実相
- 三、マルクスによる近代社会批判
- 四、マルクス主義は生産力主義ではない
- 五、ソ連型の国家社会主義の矛盾と顛末
- 六、現代社会における特殊的矛盾を観て

III 人類史的危機止揚の展望

- 一、ソ連新左翼の動向とエリツィン
- 二、二心同体のノーメンクラトゥーラ
- 三、アメリカの加速度的没落と日本
- 四、PKO反対と日本新左翼の課題

IV 五五体制の終焉と革命派の新課題

- 一、55年体制成立時点の構図
- 二、理念的拮抗対立の空洞化
- 三、政官財癒着の腐朽的構造
- 四、隆替劇の永続革命的促進
- 五、共産主義根本理念の宣揚

V 現代社会における選挙戦の意義

- 一、永続革命の一環として——マルクスの時代
- 二、革命政権の大衆的認証——ロシア革命の教訓
- 三、日本資本主義の変動——選挙戦の今日的意義
- 四、“住民の代表”を議会へ——革新系議員の責務

補・プロレタリア権力への道

- 一、旧左翼の革命路線
 - 1、社会民主主義
 - 2、コミンテルン
 - 3、構改・ソ連派
 - 4、中共派
- 二、新左翼の政治路線
 - 5、革命路線劃定の諸前提
 - 6、日本革命の展相の予料
 - 7、新左翼の任務と課題

廣松渉 私記 熊野純彦

- 一 夢みられたふるさと
- 二 まぼろしの九州人民共和国
- 三 夜と霧の時代のなかで
- 四 あかつきの鐘をならすもの

さて、切り抜きメモです。前の二つのメモと同じように備忘録的に簡単に書き遺します。
対話というか、問題提起を「・・・」の後に斜体文字で貼りつけます。

「Ⅰ 東欧激変と社会主義の行方」・・・これは講演録です

「二、スターリンによるロシア革命の歪曲」

「スターリン主義の社会体制はそもそも一種の資本主義にすぎなかったという見解もありました。・・・・・・」 24P・・・・一応「国家資本主義」という言い方が定説的になっているようです。

「ご承知の通り、マルクス本人は社会主義という歴史段階は立てておりません。／マルクスは、資本主義社会のあとに、プロレタリアートの革命的独裁の過渡期があって、共産主義社会になると考えました。ただし、その共産主義社会を低次の段階と高次の段階との二段階に分けて考えております。／レーニンは、マルクスのいう低次段階の共産主義社会を社会主義社会と呼ぶことで固有・高次の共産主義社会から区別したわけですが、その社会主義社会の実現でさえかなりの将来のことと考えていたようです。・・・・・・」 24・5P

「ところが、ヨーロッパ革命が挫折し、レーニンが死んだ後の、一九二四年末に、スターリンはソ連一国での社会主義の建設が可能だと主張し始めました。・・・・・・」 26P

「四、帝国主義包囲下でのソ連経済の歪み」

「戦後世界が旧植民地体制を再編したことも、植民地解放闘争のエネルギーや米ソのパワーポリテックスの屈折といった諸要因が絡んでのことではありますけれど、資本主義がフ

イスカル・ポリシーなどによって先進国での国内市場を内包的に拡充できる体制に再編したことの関連で把えねばなりません。」 35P

「Ⅱ 社会観の哲学」・・・これも講演録

「一、近代市民社会における「自由」

「ところが、この賃労働—資本関係ということの実態—を考えると、形式上は自由で対等な関係であっても、内実においては服属の関係になっている。マルクスとか社会主義者とよりもはるか前にルソーなんかよりも前に、例えばニコラス・ランゲなんていうひとがいて、近代社会というのはある意味からいうと、過去よりも一番ひどい、一種の奴隷制社会なんだということをいちやく指摘しております。」 47P・・・「賃金奴隷制」

「三、マルクスによる近代社会批判」

「さらに、マルクスは計画経済ということも、言葉としてもどこでも言っていない。・・・・・・」 56P

「・・・・・・しかしエンゲルスにしても、あるいはエンゲルスに指導を受けていた第二インターナショナルのカウツキーとかベルンシュタインというような人達も、マルクスが既成の社会主義に対して批判的であったことを承知しており、自分たちの立場を社会民主主義と自己規定しました。」 57P

「・・・・・・マルクス本人は社会主義という言い方に対して一種の反発をもっていた、自分は絶対に社会主義を名乗らないという、かなり強い考えがあったように思われます。」 58P

「マルクスとしてはそういう一種のアゾツィールテゲゼルシャフト、共同組合化された社会、『共産党宣言』の用語でいうと、アソツィアツィオン、一種の共同組合的社会を考えていた。」・・・・・・ 62P

「四、マルクス主義は生産力主義ではない」

「生産力第一主義という批判を聞いたら、マルクスやエンゲルスは、ヒックリして我が耳を疑うことでしょう。・・・・・・」 64P

「・・・・・・分業が固定化されてしまうと、それが一種の階級的な構造になってしまうこと、あるいは悪い意味での官僚主義的なシステムになってしまうということです。原理的にいくらでも流動的であるということになれば、総体的にはフィックス (*fix* 固定) されているにせよ、草野球のチームのように、人格的には対等・平等な社会になると思います。」 65P

「マルクスは実は生産力の定義をどこでもやっていません。次のようなファクターによって決まるだろうという言い方はしている。労働対象の在り方、それから労働手段、例えば機械であるとか道具であるとかの在り方、さらには生産の技能、それにまた労働の強度、インテンジテートです。」 67-8P

「マルクスには生産力という概念と、生産関係という概念と、それから生産様式という概念がありますが、これをインチキな弁証法的概念体系に仕上げたのがスターリンの『弁証法的唯物論と史的唯物論』です。生産力というのは一口で概念化してしまうと人間と自然との関係、それから生産関係というのは清算における人間同士の関係、そしてこの両方を包摂するのが生産様式という概念だというわけです。つまりスターリンの場合には、生産

力と生産関係と生産様式というのが、何か弁証法の三概念ということで整理されている。そういう形で生産力と生産関係をふりわけているんですが、私の読む限りマルクスの生産関係という概念と生産力という概念は、見る角度は違うんだけど、事柄としては同じことを見ているわけです。・・・・・・」 69P

「・・・・・・マルクスは、人間の本質も社会関係の総体であるという言い方をしていますし、社会というのも人間の諸関係だと言うように、関係ということを非常に強調する。そういう発想からしますと、生産力、生産関係というのが別々にあるんじゃないくて、一つの対自然ならびに人間関係のダイナミックな関係が成立していて、その在り方が歴史的に発展していく。」 70P

「・・・・・・マルクスにおいても社会観の哲学は人間観の哲学と相即するものになっている所以です。」 71P

「五、ソ連型の国家社会主義の矛盾と顛末」

「・・・・・・レーニンの死後、スターリンは、ロシア一国での社会主義建設が可能であるという考えを打ち出し、反対派を次々と追い落として、一九二八年にはついに一国「社会主義」の建設を強行し始めました。が、それは本質的に無理な企図であって、変畸せる「社会主義」国家体制、一種の「国家社会主義」(シュターツゾツィアリズムス)をもたらす結果になりました。」 74P

「私は、テクノクラート(狭義の技術官僚だけでなく経営や行政の官僚をも含めます)とパルティクラート(党官僚)がそのまま対立するようになっているとは思いません。ノーメンクラトゥーラは、たしかに、パルティクラートとテクノクラートから成ってはおりますが、いわば両方の“魂”をもっていて矛盾に悩んでいるというのが実情でしょう。もちろんテクノクラートの魂で突っ走ろうとしているいわゆる“改革派”と、パルティクラートの魂で突っ張ろうとしている“保守派”との両極が存在しますけれど、そのような連中をもふくめて“二つの魂”で動揺しているものがノーメンクラトゥーラの大部分ではないでしょうか。」

80P

「六、現代社会における特殊的矛盾を観て」

「・・・・・・労働力の再生産に必要な分以上という意味での「剰余労働」生産物の配分を、労働者たちがいわば協同経営者として決定するのではなく、「剰余労働分」をすっかり吸い上げられてしまう構造になっている場合には、実質的には資本主義的賃金奴隷と同じになってまいります。その吸い上げが、富国強兵のための軍需に当てられるだとしても、また、拡大再生産のためのファンドに当てられるだとしても、その元資になる「剰余労働」生産物をどう配分するか(消費分にどれだけ当てるか)の決定権が労働者にない場合には、よしんばノーメンクラトゥーラが経済学的にみて一切寄食(収奪)していないとしてさえ、労働者は事実上“賃金奴隷”であり、その経済体制は一種の賃金奴隷制だということになります。」

83-4P

「ところで、現代社会というものを各国的に観る域を超えて、世界システムの相で視るとき、また別の視角から種々の問題が孕まれております。いわゆる南北問題が最たるものだと思います。そうしてもう一つ、各国的にも世界的にも、エコロジカルな危機という問題が目にとまります。」 84P・・・・この後世界の矛盾的現況を展開しています

「Ⅲ 人類史的危機止場の展望」・・・党派「戦旗」の機関紙へのインタビュー投稿文です

「二、二心同体のノーメンクラトゥーラ」

「★『モスクワ人民戦線』の記者の佐久間邦夫さんが、パルティクラート(党官僚)という概念とテクノクラート(技術官僚といっても工業的な分野の官僚だけでなく、行政官僚も含めたものですが)という概念と区別して使っておられますね。私も、この二つの面の内部矛盾ということを考えます。／もちろん、パルティクラートと区別してテクノクラートといったとしても、テクノクラート自身党員であり、しかもかなりの幹部ですから、二つの実体の対立というより、同一の主体が二つの魂をもって揺れ動くといった方がいい。「一心同体」とでもいうのかな。」 96-7P

「三、アメリカの加速度的没落と日本」

「ところがそのアブソーバー(吸収材)としてのアメリカの役割が、いよいよ限界になってきた。ということになると、日本の対米直接輸出およびアジアN I E Sを通じた迂回輸出、それによる対米黒字の累積という構造も、うまくいかなくなる。」 101-2P

「Ⅳ 五五体制の終焉と革命派の新課題」・・・講演録です

「一、55年体制成立時点の構図」

「・・・・・・五五体制の成立の経緯を理解するうえでは、今日の眼からはナンセンスであろうとも、マルクスの謂うフォルクスフオアウアタイル、すなわち、人々のあいだでの先入見的ドグマを無視できないのです・・・・・・」 114P

「二、理念的拮抗対立の空洞化」

「・・・・・・次期選挙を睨(「にら」のルビ)みつつつどのような合従連衡(「がっしょうれんこう」のルビ)ひいては政党の再編を進めるか端倪(「たんげい」のルビ)すべからざるところがあるということであります。」 123P

「三、政官財癒着の腐朽的構造」

「代議制民主主義というものは、選挙民の側が有能な人物にお願いして代議員になって頂くという建前であり、この構図が充(「み」のルビ)たされてはじめて代議制民主主義の名に値します。しかるに、候補者の側が「票を買う」ようでは民主制が聞いてあきれます。／直接間接に金銭で買うのではなく、利益誘導を約束して選挙民を釣るのであっても、やはり同断であります。或いはまた、選挙が一種の人気投票に類するものになっている場合にも、「衆愚政治」に陥りかねません。／現代資本主義国家における選挙の実態は如何でしょうか？ブルジョア民主制が自己破綻に瀕しているように私には思えます。」 130P

「四、隆替劇の永続革命的促進」

「さて、今後の政治情勢は波瀾含みでもあり楽観しすぎではなりませんまいが、一時的な曲折はあっても、趨勢としては、五五体制下に比べれば中道寄りの政権の機関を経て、更にはより“穏健左派”寄りの政権へというベクトルで暫くのあいだ進む公算があります。こりベクトルを、マルクスが説いた意味での「永続革命的」にどう左方に伸長して行くかが課題になります・・・・・・」 137P・・・これは外れています。廣松さんは、ポスト・グローバルゼーションの時代の、右派ポピュリズムの台頭やファシズムの隆起をとらえ損なっています。ここからが正念場です。

「五、共産主義根本理念宣揚」

「・・・・・・・・ソ連社会が何であったのか、それは建前としては“マルクス・レーニン主義”を奉じていても、実態においてはおよそマルクスの理念に背馳(「はいち」のルビ)するものにすぎなかったこと、そして、その社会がこうしかじかの歴史的経緯で自己崩壊に至ったのであること、このことの説明まで必要とします。・・・・・・・・」144P・・・そもそもレーニン主義の止揚が必要

「・・・・・・・・これらの課題については、それぞれの分野におけるいわゆる専門的研究者たちをも動因し、彼らの蓄積を組織的に汲み上げ、その成果を体系的に整備して更なる深化・具体化・展開を期すことが可能ですし、そのための機会と機構を率先して設定することが活動家に望まれます。そのための準備的条件は、例えば『フォーラム 90s』などの形において既に存在しますので、その活用が図られてよいのではないかと思います。・・・・・・・・」148P

「革命的暴力論、これがまた重要な鍵になりましょう。プロレタリア独裁の革命的権力が過渡期には必須だというのが我々マルクス派の基本的了解事項の一つであります。広汎な大衆を思想的・組織的に獲得するうえで、これが大きなネックになっているという現実があります。・・・・・・・・これが共産主義社会建設の方策論(市場や貨幣を過渡的にどう扱うのか、計画経済のありかた、などの議論と絡めて)とも関連づけて提示さるべき課題であることは附言を要しないでありましょう。」149-50P・・・革命のファクターは函数的連関態の変数的にとらえられること。プロ独の問題は、専制政治の暴力的支配の中で、「武装蜂起—権力奪取—プロレタリア独裁」から「共産主義的第一段階への移行」として立てられていたこと。普通選挙権が一応機能しているところで、武装蜂起革命論はありえるのでしょうか？ 右派の反革命クーデターにどう対処するかで、暴力性が必要になるときもありうるとしても、これには、韓国における大統領の軍事クーデターへの国会議員と民衆との連繋で阻止しうることも参考になるし、そして民衆のもっと大規模なデモンストレーションで阻止することも考えられる。問題は、プロ独はマルクス派は別の問題を対象化できてこなかったというところで、そして歴史的事実として、プロレタリア単独で権力を掌握などとはできないということ、マルクス／エンゲルスも、『ゴータ綱領批判』で草案にある他の階級・階層を敵対視する路線を批判していた事実もあります。また、マルクス派の差別を対象化している論客は、マルチチュードやサヴァルタン概念で、革命の主体に「他の」被差別者を含めることを理論化しています。そもそも、「後進国」の民衆という被差別者総体を切り捨てた、「先進国革命論」でしかないのです。「共産主義者には国境はない」というテーゼに反してもいるのです。

「Ⅴ 現代社会における選挙戦の意義」・・・講演録

「・・・・・・・・俗に普通選挙権と言われるものが実現したのは、一九世紀も終りに近くになってのことです。／婦人参政権、すなわち女性にも選挙権を与える形での普通選挙制度が実現を見たのはいつのことであったか、歴史の知識を思い出してください。一番先進的と言われたイギリスにおいてさえ、第一次世界大戦以後、一九一八年でしょう。アメリカは更に二年遅れて、一九二〇年です。ということは、ロシア革命のとき、ボルシェヴィキ政権が一九一七年の十一月に実施した憲法制定議会の選挙が、歴史上初めての、婦人参政権を含む普通選挙であった、ということになります。」155-6P

「一、永続革命の一環として——マルクスの時代」

「ラッサール派の場合には、人々に理解させ、政府に圧力をかけて、一定の国家主義的(シュターツツォアリスティッシ)な政策を採らせようという考えでしたから、彼らが選挙に参加したのは判ります。しかし、マルクスの場合、反動政府に対するそういう幻想とは無縁でありますから、ラッサール流の思惑で選挙に臨んだわけではありません。／マルクスが一八五〇年に選挙への積極的参加を構想したのは、彼の永続革命論の戦略戦術に基づいてのことでした。……」 160-1P

「マルクス・エンゲルスは、このことをもちろん承知しておりました。ですから、ドイツやオーストリアで平和革命が可能などとは考えませんでした。しかし、マルクスは、イギリスやアメリカやベルギーといった議会制民主主義の定着している国では、議会を通じてプロレタリア政権が成立した場合、反動派の叛乱が起こることなく、プロレタリア独裁政権を維持できる可能性がある、と予想した次第なのです。」 163P

「二、革命政権の大衆的認証——ロシア革命の教訓」

「先にも申しました通り、マルクスは当時の左翼陣営では例外的に議会選挙に独自候補を立ててコミットする方針を打ち出しました。そして彼の晩年から今世紀の初めにかけて、マルクス派の党組織が議会選挙で進出したことが一契機となって、ヨーロッパ各国の左翼運動において、マルクス派が主流派の位置を占めるようになりました。理論的に優れているという要因も勿論ありはしますが、片々たる少数派にすぎなかったマルクス派が、プードン派、バクーニン派、ブランキ派、それにアナルコ・サンディカリスツなど、往時の大勢力を追い押して主流派の位置を固めるに至ったのは、議会選挙に消極的だった他派を尻目に、議会選挙に積極的に取組んだことを抜きには語れません。」 164-5P

「三、日本資本主義の変動——選挙戦の今日的意義」

「日本に焦点を置いて申します。戦後日本の経済は、一口で言えば、対米貿易の黒字で資源を調達するという構図の中で、高度成長や安定成長を遂げてきました。しかも或る時期からは、対米貿易の大幅な黒字を資本輸出することで、今では世界の債権国に成り上がっております。貿易黒字も、昨今では対ECの黒字も大きく、対アジアNIESの黒字も大きくなりました。ところで、アジアNIESはこれまで対米貿易で黒字を上げているわけですが、これら諸国は日本から輸入し、それを用いて製品化したものをアメリカに輸出しては稼ぐ構造になっている。日本から見れば、これも間接的な対米輸出と言うこともできます。この間接輸出の分も入れますと、日本の総輸出額の五割以上になり、利益でみますと、貿易黒字の八割にもなります。」 171-2P・・・失われた三〇年で、この構造は瓦解しています。

「それだけに、資本主義体制派の側には、収奪はしても自らは捲き込まれないようアメリカなどと結んで旧体制を維持しようとする部分、背に腹はかえられない限りで余儀なくコミットする部分、こういった分立を生じるでありましょう。また、自称社会主義派の内部にも、共産主義に対してどういうスタンスを取るか、分化・再編が不可避になることでしょう。」 177P

「四、“住民の代表”を議会へ——革新系議員の責務」

「……議員の積極的活動と言っても、一昔前にあったような、いわゆるドブ板議

員の受請い・代行という形では済みません。生活協同組合運動とか、環境破壊反対運動とか、こういった形態だけだとは限りませんが、地元住民の運動に支えられてはじめて実効性をもちえます。事と次第では住民の自発的運動をオーガナイズすることも必要であり、・・・・・・」181P

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 194 号」アップ(26/8/18)
- ◆「反差別資料室C」の「文献室」、新しい本の購入や読書に合わせて、今年3月初めに約1年ぶりにリアップしました。
- ◆メインホームページ「反障害－反差別研究会のHP」のIV．F〔廣松ノート〕
<http://www.taica.info/hiromatunote.html>に『存在と意味 第二巻』をアップしています。
<http://www.taica.info/hironosoni2.pdf>

(編集後記)

- ◆月一発刊態勢、続けます。それを少なくとも200号までは続けます。
- ◆巻頭言は、「これまでの左派運動＝社会変革運動のとらえ返し——マルクス・廣松理論からの批判的・対話的検証——」。これは、「社会変革への途」の一草稿に位置づけられます。
- ◆読書メモは、廣松運動論三部作を取り上げました。先に、巻頭言の構想があり、読書メモを書いてから、そこから、切り抜きメモを貼りつけながら、それを一部利用しながら、巻頭言を書き上げました。
- ◆実は、故立岩真也さんというわたしと障害学をつなぐひとがいて（わたしの勝手な思いにすぎないことです）、そのひとの主著に『私的所有論』というかなり厚い本があります。このひとは、そもそもマルクス／エンゲルスを読んでいると思われるのですが（マルクスの唯物史観的な考え方が記されているのです）、その『私的所有論』膨大な文献表の中に、マルクス／エンゲルスの名は記されていません。ですが、なぜか、廣松渉さんの本が二冊あります。それが『現代革命論の模索 改装版』[1975]と『新左翼運動の射程』[1983]だったのです。その二冊を参考文献としてあげている箇所を切り抜きます。「もしかすると、このようなことはどんな関係のなかでも自然に起こることなのかもしれない。しかし、私達が今の社会に暮らしてきた私達である以上、この社会・関係に意識が規定されているからそうになってしまうのだと言われたとしても、否定しきれない。関係が全域的に変われば想定される欲求のあり方が実現されるが、そうっていないのだから実現されないという主張は、証明もされない（◆25）が、反証もされず、主張としては破綻しない。局所に望ましい関係を作っていくことが問題を解決しないのであれば、全域が一気に変わらなければならない。しかし、現在の関係が現在の私達を作っている限り、待っていては変わらない。とすれば事態を見抜いた者達、少数者達が先駆的にいままあるものを全面的にいままあるものを全面的に覆してしまい、関係を変えてしまえば、その後、関係が存在（意識）を規定するのだから、事態はうまく運ぶだろう。その他の人々の意識も変わる。だからまず少数者

が、多数の承認を得られないとしても、関係を変えるしかない。このような主張が、論理必然的に導かれる(廣松渉[1975][1983]、等)。だが、それにしても革命は容易ではない。」295-6P。これはまさにレーニン主義的な外部注入論なのですが、廣松さんの本からそれを読み取っているのです。

立岩障害学は二つの脈絡があり、ひとつは障害学関係の文献の洗い出しで、それは立命館大学大学院先端研というところで、「「生存学」創成拠点」としてホームページを作り、膨大な資料の蓄積をなしていったことがあります。この貢献は、歴史的に評価され引き継がれていくことです。もうひとつは、「障害者」の存在を否定する論攷をことごとく批判しようとした「障害の否定性」の否定の試みです。これはわたしのライフワーク的テーマでもあり、わたしが共鳴していたことなのですが、それは決して巧くいったとは言い難いのです。「前提を設定し間違えた」とわたしは指摘しています。『私的所有論』の論攷の最初の条件設定的な文があります。「それにしても何が誰のものか、各自が何について権利をもつか、それは明らかではないかと言われるかもしれない。けれども、そうではなく、少なくとも私にとっては、この社会でごく普通に起こっていること自体が問題だった。「私が私の働きの結果を私のものにする。」それでよいのか。同時にそこから私達は抜けられるのか。頭がわるい。体がわるい。それでできない。そのことで不当な不利益を受けていると言う人がいる。実際このようにこの社会は構成されているのだから、これは全く正当な指摘であり、この社会の構成の基本的なところを問題にしたのだから、根底的な指摘だった。しかし、その提起は結局どうなったのか。それは、根底的であるがゆえに、行く場の見つけにくい提起でもあった。これは、全く時代から取り残されたような、しかし実はそんなに古くはなく、この国では一九七〇年頃に示された問いであり、その時から既にどこにも行き着かないような問いとして示された。私は、このように発せられた不活性な問いを、近くにいて聞く側にいた。けれども、その行き着かなさが不満だったから、考えることにした。もう一つの話は、結局いろいろやってみてわかったように「市場経済」で行くしかないのだし、行くのがよいのだし、そこにまずいところがあれば、「福祉国家」か何か、手を打てばよろしい、このように終わる。しかし、それで終わっているのか。なにごとにも平穩無事だという安穩な主張を受け入れない。しかし、言い放しの批判にも与することができない。「能力主義」「業績原理」が問題だとしてそれを一体廃棄することができるのか。そしてどんな代替案があるのか。」3-4P。結局、立岩さんは市場原理の枠内で論を進めることになっていくのですが、時々はみ出していきます。彼は、単に「近くにいて聞く側にいた」わけでもないと思うのですが、とにかく、「行く場」を見失うような状況にして、その総括がなされなかったところの責任ということが問題としてあるのです。そこで、その責任を担う世代のただのひとりに過ぎないわたしとしても、立岩さんと対話を求めて文を書き [三村洋明「立岩真也『私的所有論』との対話」](#)、彼がわたしの対話・問いに答えていくとしていたので、その後の彼の著作を追っていました。彼の早すぎる死が、もはや対話を許さないのですが、わたしの問いと自答のひとつが、今回の巻頭言と「読書メモ」なのです。

◆兎に角、わたしにとって、立岩さんは障害学へつなぐひとという思いがあったのですが、余りにも早い・若い死でした。合掌！

◆立岩さんのところで引き継いでいた障害学研究ネットワークのメーリングリストで、故山

本眞理さんが、「社会モデルはもう捨てる、人権モデルを採る」と書いていたのですが、「人権モデルなんて、医学モデルへの舞戻りではないか、何で舞い戻ったのか」という思いをもったのですが、最近、障害学 20 周年の特集号『障害学 20』を読んでいて、やっと事態が飲み込めました。何か「新しい障害モデル」としての「新しい「人権モデル」の議論が起きているようなのです。テレジア・デクナーというひとが発信源のようです。川島聡さんが一定押さえているのですが、認識論的なことと、規範論・運動論的なことをごっちゃにしているのです。デグナーは社会モデルの発展形として新「人権モデル」なるものを出してきているのですが、川島さんはアメリカ社会モデルを認識論的なことと置き、規範論・運動論としておいているようです。そもそも、修正資本主義の論理として宗教的色彩を帯びて出てきた人権論が世界を覆っていることからまだ抜け出せていないのです。人権とは差別のない関係の物象化した謂いで、政教分離で宗教的なことを取り除けば、それは差別禁止規範・禁止運動とすればいいことです。川島さんもそのようなことをちらっと書いています。まだきちんと整理出来ていないようです。そもそも、どちらもアメリカ社会モデルは医学モデルへの舞い戻りでしかないことを押さえていないのですが、『障害学 20』の読書メモを書いているのですが、掲載するのは、まだずっと先になるようです。その前に宿題の「障害関係論原論序説」の構想を練り始めているので書き始め、草稿段階でまとめるのが先になるようです。その読書メモも早く届けたいので、何か方策を講じて発表するようにしようかと思っています。

反障害－反差別研究会

■会の方針

「障害学において、「障害とは何か」という突き詰めがなされないまま、議論の煮詰めもなされないままでした。そこから起きる混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げていました。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この「会」でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成の作業です。「会」としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされてきました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しながら、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会を変えようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論・深化していきたいと考えています。(文責 三村)

■連絡・アクセス先

E メール hiro3.ads@ac.auone-net.jp (三村洋明)

反障害一反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>